呪眼ー黒の契約

以春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪眼―黒の契約

【Ｎコード】
Ｎ９７２３Ｎ

【作者名】
以春

【あらすじ】
ある日事故に巻き込まれたユキハとタカヤは黒い世界に招かれる。死にかけているタカヤを救うため、ユキハはフキという不思議な男と片目を差し出すことで契約を交わす。そして戻った日常。ユキハの目には見えざるモノが見えるようになっていた・・・。

プロローグ：黒の契約（前書き）

暗い感じの題名ですが元気良く書いていきたいと思います（笑）よければ楽しんでください。

プロローグ：黒の契約

真っ暗だった。いや、暗いわけではない。自分の体はよく見える。周りが真っ黒なのだ。

頭がズキズキする。立ち上がろうとして目眩（めまい）を覚える。

いったい何がどうなったのか、岬由起葉（みさきゆきは）は現状が理解できずにいた。

体を支えようと手をつく。すると、ピチャッと液体らしきものが手についた。持ち上げて見て、ぎょっとする。手にはべったりと血がついていた。

由起葉はゆっくりと横に目を向ける。そこには衝撃の光景があった。

真っ黒な世界に赤黒い血だまりを広げて、柏井多加弥（かしわいたかや）が横たわっている。ぴくりとも動かない。

「タカヤ・・・？」

クラクラする頭を押さえながら近付く。触れた体は冷たくなっていた。

「タカヤ・・・。タカヤっ」

由起葉は自分たちの身に起こったことを徐々に思い出した。

夏期講習を終えて、いつものように二人並んで帰り道を歩いていた。日はとっくに落ちて、空には月が輝いていた。いつもと変わらない二人の距離。いつもと変わらない他愛のない会話。そしてまた、いつもと変わりばえのしない明日が、当然のようにやってくると信じていた。

だが、突然の不幸が二人を襲った。事故だった。猛スピードで突っ込んできた車は、歩道を歩いていた二人を捕らえた。瞬間的に手を伸ばした多加弥は由起葉を突き飛ばしたが、それでも間に合わず、二人は跳ねとばされて意識を失った。

ここがどこかはわからないが、自分は生きていて、多加弥は死ん

でいる。胃の中が焼けるように熱くて涙が出た。
「タカヤ・・・なんで・・・」
「諦めるのはまだ早いよ、お嬢さん」
打ちひしがれていた由起葉は驚いて顔を上げる。真っ黒な世界に自分たちしかいなかったはずなのに、今は見知らぬ男が立っている。真っ黒な服を着た、真っ白な髪の男だった。
血に染まったような赤い目が鋭く光る。人間ではない。そう思ったが、この世界自体が現実的ではない。化け物がいたって不思議じゃない。
「かわいそうに、もうすぐ死んじゃうね、彼」
「タカヤはまだ生きてるのっ？」
「ギリギリだけどね。どうする？助けたい？」
「助かるのっ？」
すがるような思いだった。由起葉の必死な顔を見て、男はうれしそうに微笑む。
「お願い、助けて」
「いいよ、助けてあげても。でも、ワタシの力だけではちょっと難しいんだ」
「私にできることなら何でもするからっ」
男は満足そうに笑う。
「じゃあまず、君の眼をもらおうかな。片目でいいよ」
「目・・・？」
「何でもするんだろ？片目くらいなくなっても死にはしない」
「いっ、いいわ。タカヤが助かるならあげるわ」
「契約成立だ」
男は由起葉の右目に手をかざした。見開かれた瞳から光の粒が掌に集まっていく。
男がその粒を手に収めた瞬間、由起葉を激しい痛みが襲った。右目が焼けるように熱い。由起葉は右目を覆ってうずくまった。
「あ・・・あぁ・・・」

「君みたいな子から眼をもらえるなんて光栄だよ。綺麗な光だ」
男は光の粒を眺めてから口に入れて飲み込んだ。
「うっ・・・・。約束でしょ。タカヤを早く・・・・」
「そう焦るなよ。余韻を楽しんでるのに」
あまりの痛みに意識がもうろうとしてきた。由起葉は額に汗をびっしょりかいて倒れこんでしまった。
「大丈夫？もう少ししたら痛みも治まるからさ」
「私はいいから・・・早くタカヤを・・・」
「健気だなぁ。じゃあ、悪いけど魂を半分もらうよ」
男は今度は胸の辺りに手をかざした。
「あげるの・・・眼だけじゃないの？」
「眼はワタシに対する捧げ物だ。君から眼をもらうことでワタシは呪いの契約を結ぶことができる。これによってワタシは君のために力を貸すことができるんだ。でも、死にかけの人間を助けるなんてそう簡単にできることじゃない。だから君の命を半分彼にあげることで生をつなぐ」
男の話は理解できなかったが、言うとおりにするしかなさそうだということはわかった。
体がだるい。目を開けていられない。遠ざかる意識の中で男の声が聞こえる。
「君も彼も助かる。目覚めた世界で君には人には見えないものが見えるかもしれないが、気にしないことだ。でも、もし困ったら呼びなさい。ワタシは不生(ふき)だ」

1見えざるモノ

目を覚ますと、そこは病院のベッドの上だった。体は少しだるかったが、特別痛いところもなく、容易に起き上がることができた。

「私・・・生きてる・・・」

ガラガラと音がして誰かが入ってきた。

「ユキハっ」

現れたのは多加弥(たかや)だった。目を覚ました由起葉(ゆきは)を見て駆け寄ってくる。元気そうだ。

「タカヤ、大丈夫なの？」

「あぁ、俺は幸い軽傷で済んだから。ユキハはどう？なかなか目を覚まさないから心配したんだ」

由起葉の脳裏に血だらけの多加弥の姿が浮かぶ。あれで軽傷なわけがない。でも、実際多加弥は怪我のひとつもしていなそうだ。

あれが夢だったのだろうか。跳ねられたのは本当は自分で、死にかけていたのも本当は自分。でも、それにしては自分も傷が少ない。

どこからどこまでが現実なのかよくわからない。

「タカヤが無事でよかった。私も痛いところとかないし、案外大丈夫だったみたい」

「うん・・・」

笑いかける由起葉に対して、多加弥は気まずそうに目を逸らした。

「どうしたの？」

「ユキハ、違和感はない？」

「・・・ない、と思うけど・・・」

目覚めたばかりで何が違うのかわからない。由起葉は手足を動かしたり、部屋を見回したりしてみた。

「ユキハ。左目を手で覆ってみて」

「こう？」

言われたとおりにしてみて、由起葉は恐ろしい現実を知った。暗

闇に突き落とされる。目覚めて消えたはずの真っ黒な世界が再び表れる。

由起葉は右目の光を失っていた。

「私・・・目が・・・」

「事故のとき、何かの破片が目に刺さったみたいなんだ。病院に運ばれたときにはもう手遅れだったみたいで」

それは事実ではなくこじつけだと由起葉は思った。自分の目はあの不生(ふき)とかいう男に持っていかれたのだ。片目の光を失うことで多加弥に生を与えた。どこまで信じていいかわからないが、まったくの夢ではなかったようだ。

「ユキハ・・・」

「大丈夫だよ。タカヤも私も生きてる。そっちの方が大事だ」

「俺、頼りないけど、ユキハの片目を補えるように傍にいるから。ずっと、この先もずっと、傍にいるから」

今にも泣きそうな顔をする多加弥に、由起葉は手を伸ばした。頭をよしよししてやる。

「べつに私の目が見えなくなったのはタカヤのせいじゃないでしょ。だから、そんな責任みたいな感情で傍にいるなんて言わないで。私のこと好きだから傍にいるって言ってよ」

「も、もちろんだよ。ユキハのこと好きだから、ずっと傍にいるよ」

「それ、聞きようによっては、プロポーズになるよ」

この言葉に多加弥は慌てた。どこまで本気かわからない。

その後、病室には家族や医師などが次々と訪れ、一気に賑やかになった。

由起葉は医師からの右目に関する報告を、一人冷静に聞いていた。

・見えざるモノ（2）

数日して、由起葉は無事退院することができた。先に退院していた多加弥が迎えにきてくれる。

「ユキハ、準備できた？」

「うん」

いろいろと動くようになって、片目の見えない不自由さを少し感じるようになった。今も荷物とのバランスをとるのによろけてしまう。

「大丈夫？」

「平気」

多加弥は荷物を持って由起葉を支えた。

二人で病院から出る。空は曇り、昼間だというのにどんよりと薄暗かった。せっかくの退院を祝うような天気でないのが残念だ。

由起葉たちは病院前のバス停を通りすぎ、街の方へ歩いていった。

「せっかくだし、ちょっとデートしようよ」

「いいけど、退院できたからって本調子なわけじゃないんだよ？無理しない方がいいんじゃ・・・」

「なに保護者みたいなこと言ってんのよ。自分だって私よりちょっと退院が早かっただけじゃない。あ、もしかしてタカヤ、調子悪いの？」

「俺は元気だよ。いいよ、ユキハのしたいようにしよ。でも、具合が悪くなったらすぐに言ってよ」

「わかってる」

今日は真っ直ぐ家に帰ってもよかった。なのに病院を出て空を見上げた瞬間、多加弥との時間を作りたいと思ってしまったのだ。

明日でもできること。でも、その明日は必ずやってくるとは限らない。時間は流れる。日は昇る。だからといって全ての人に明日があるとは限らないのだ。それを由起葉はあの黒い世界の中で知った。

由起葉は多加弥の手をそっと握った。温かい。生きている。
二人は駅前の通りに出た。夏休み中ということもあって、子供が多い。同年代の子たちもたくさんいる。
「友達に会ったりして」
「事故のこと、塾の子しか知らないから」
「塾ではもう知れ渡ってるの？」
「見てた子がいたみたい」
「そうなんだ」
「ユキハ、ここ人多いしちょっと外れない？人混みって疲れるっしょ」
多加弥は気遣っているのか、由起葉を駅前から連れ出そうとした。特に目的があるわけではなかったので、由起葉はそれに従おうと足を踏み出す。
そのとき、何気なく目を向けた駅前デパートのウィンドウに映る自分の姿を見て、由起葉は息を呑んだ。片目が。見えなくなった方の右目が、赤く光っている。
その色は、あの不生という男の目と同じ色だった。
「な・・・に、これ・・・・」
「ユキハ？」
振り返った由起葉を多加弥は不思議そうに見つめている。
（タカヤには見えてないんだ）
もう一度ウィンドウをのぞいたが、由起葉の右目の光はすでになくなっていた。なんだったのだろう。でも確かに見えた。
「どうしたの？大丈夫？」
「うん。なんでもない」
由起葉は歩きだした。二人で駅の裏通りの方に回り、公園につながる道を歩いていく。晴れた日には木陰がちょうどよい道なのだが、あいにく今日は曇っている。
由起葉たちの横を小学生と思われる三人組が元気よく走り抜けていった。これから公園で遊ぶのかもしれない。

「ねぇ、タカヤは事故の後からおかしなこととかない？」
「おかしなこと？なんだろう。・・・・生きてることがおかしい、とか？」
「なにそれ」
由起葉は笑ったが、本当は多加弥の言うとおりだ。生きているはずのない多加弥を、由起葉の魂が再び呼び起こした。多加弥の体の中には由起葉の命が半分宿っている。
そこまでしてでも助けたかった。多加弥の意志など確認することもなく、ただただ必死に生き長らえさせた。わがままだったかもしれない。多加弥が生きたがったわけではない。自分が生きていてほしかっただけだ。
「タカヤが生きててくれて、よかった」
「俺も、ユキハが生きててくれてよかった。本当なら、俺の目が見えなくなってればよかったのに・・・」
「そんなこと言わないでっ」
思わず大きな声が出た。
「ご、ごめん・・・」
「あ、ううん。私の方こそごめん・・・」
気まずくなって、由起葉は多加弥を引っ張ってベンチに座った。手をつなぐ。何も言わなくても思いが伝わればいいのにと思った。
そのまましばらく無言で座っていると、前方を一人の女性が歩いていくのが見えた。主婦だろうか。片手に買い物袋を提げている。なんということもない、普通の光景だった。
ただひとつ、彼女の足元を除いては。
（な・・・に、あれ・・・）
空は雲で覆われ、日の光はわずかにしか届かない。なのに、その女性にだけ真っ黒な影ができていた。影ははっきりとした人型をしており、女性の動きに合わせることもなく、その形のままで一緒に移動していく。
由起葉は空いている方の手で目をこすった。そしてもう一度見て

みると、女性の足元から影は消えていた。
「タカヤ、もう行こう」
嫌な感じがして、由起葉はその場から立ち去ることを決めた。気のせいだと思い切ることができない。
多加弥はわけもわからず由起葉に引っ張られて公園から出た。
「急にどうしたの？顔色悪いけど、大丈夫？」
「あぁ・・・うん。やっぱちょっと無理しちゃったのかな」
「今日はもう帰ろう。家まで送るよ」
二人はなだらかな坂を並んで歩いていった。病院の前からバスに乗ればこの坂は登らなくてすんだのだが、一度街へ下りてしまったので仕方がない。
坂の途中に神社へと続く階段がある。林の中へ消えるように伸びる石段だ。これが見えたら由起葉の家まであと少しだ。
ただでさえ曇り空で薄暗いのに、石段は周りの木々のせいで余計に暗く、少し気味悪かった。
前を通り過ぎようとして何気なく上を見た。すると、ちょうど誰かが神社から出てくるところだった。石段をゆっくりと降りてくる。
まだ若い女の人だった。知った顔ではない。だが、由起葉はそこから動けなくなってしまった。
「どうしたの？あの人知り合い？」
由起葉が止まったので、多加弥も一緒になって上を見る。多加弥には女の人の姿しか目に入らない。だが、横にいる由起葉にはあり得ないモノが見えていた。
真っ白な毛。人の背丈を超える大きな体。金色の目に巨大な口。どう見たってペットじゃない。そもそも動物なのだろうか。あんなに大きな犬を、由起葉は見たことがない。
巨大な犬は、女の人の後ろにぴたりとくっついて石段を降りてくる。その動きはあまりに軽やかで、体重を感じさせない。
「ユキハ？」
やはり多加弥には見えていないようだ。いったいなぜ自分にだけ

見えるのか。あれは何なのか。危険なものなのか。放っておいていいものなのか。
目が合った。女の人とではない。巨大な犬と目が合ってしまった。
（まずい）
犬が心なしか構えたように見えた。由起葉は背筋がぞわりとして、思わず逃げ出した。振り返らずに必死で走る。
またもやわけのわからない多加弥は、荷物を持って追いかける。なだらかとはいえ坂道だ。退院したばかりの由起葉はもちろんのこと、多加弥も息があがってしまった。なんとか家の前まで来て二人でへたり込む。
「ど・・・どうしたの？今日・・・おかしいよ？」
「・・・・・」
言葉が出ない。呼吸が整わないせいもあるが、落ち着いていたとしても、なんと答えていいかわからない。
多加弥の言うとおりだ。おかしい。どうかしている。自分がどうにかなってしまったのか、周りがどうにかなってしまったのか、それはわからないが、おかしいのは事実だ。
多加弥には見えないものが自分には見えている。気のせいじゃない。あの犬と目が合ったとき、どこかで確信してしまった。でも、信じたくない気持ちがある。
「タカヤ・・・」
自分の知らないことが次々と起こる恐怖で、由起葉は思わず多加弥に抱きついた。こうして顔を押し当てている間は何も見なくてすむ。それは安心につながった。
「ユキハ、ここ家の前だよ？」
「だからなに？今放したら、私死んじゃうから」
そんな風に言われて突き放せるわけもなく、多加弥は黙ってされるままにしていた。
由起葉は事故のショックで混乱状態にあるのかもしれない。だとしたら時間をかけて安心を与えてやらねばならない。多加弥は今の

状況をそう考えた。
変わらぬ日常が由起葉を落ち着けてくれるはず。見えない多加弥は信じていた。

・見えざるモノ（3）

悪い夢だ。黒い世界に落とされ、不生という男に片目をとられて、自分は幻覚を見るようになってしまった。

目が覚めて、幾日かの朝を迎えれば、そんな異常な精神状態は収まるはず。由起葉は信じて眠りについた。

しかし、残念なことに、なんでもない朝は訪れなかった。代わりに自分の見ているものが幻ではないと証明される夜が訪れた。

すぐ近くで唸る《うなる》ような声が聞こえる。眠っていた由起葉は呼び覚まされるように目を開いた。そのまま首だけ動かして部屋の様子をうかがう。

寝覚めは最悪で、視界はまだぼんやりとしている。そんな状態でも由起葉の目は、確実に二つの光を捉えた。暗闇の中に浮かぶ二つの金色の光。その辺りから低く唸る声が聞こえてくる。

由起葉は頭から冷水をかぶったように、一気に意識がはっきりした。あの光は記憶に新しい。そしてこの声。まるで威嚇する犬だ。

（まさか、昼間神社で見たあの大きな犬？）

由起葉は動けない。息をするのも忘れてしまいそうなほど動揺していた。得体の知れない何かが自分の部屋にいるのだ。どうやって入ったのかも、何が目的なのかもさっぱりわからない。ただただ恐ろしい。

（どうしよう。私まだ夢の中にいるのかな。もう一度眠れば消えてくれるかも）

由起葉は爆発しそうな心臓を押さえて、再び目を閉じようとした。

そのとき、あの犬が動く気配がした。ゆっくりと近付いてくる。気配が近くなるにともなって、由起葉の手は震えはじめた。

（やっぱり無理。こんなリアルな恐怖、夢でも幻でもないよ。どうしよう。このままじゃ私、こいつに・・・。誰か助けて）

ぐっと目をつむった瞬間、由起葉の脳裏にあの男の姿が現れた。

朦朧とする意識の中で聞いた言葉。

「君には人には見えないものが見えるかもしれない・・・。もし困ったら呼びなさい。ワタシは・・・・」

「フキっ」

由起葉は叫んでいた。

急に目の前が明るくなり、光をまとった不生が現れた。その光を受けて犬の姿もはっきりと浮かび上がる。

不生は指で五芒星(ごぼうせい)を描くと、掌を犬の額に向けてかざした。すると突然犬はおとなしくなり、しつけのされたペットのように行儀よく座り込んだ。

その一連の流れを、由起葉は茫然と見つめていた。

「呼んで正解だったね。これはまたすごいの呼び込んじゃったみたいだね」

「本当に・・・来た・・・」

「君が呼んだんじゃないか。呼ばれたら来るのがマナーだろう」

「いったい何がどうなってるの？聞きたいことたくさんありすぎるけど、あなたは答えてくれる？」

「どうかなぁ。全部は答えられないかもしれないな」

不生はいきなり犬の背に腰を下ろした。由起葉は驚いたが、犬はおとなしく床に伏せている。

「その犬、もしかしてあなたのペット？」

「まさか。ワタシは猫派なんだ」

そういう問題ではない。由起葉は突っ込みたいところを流した。

「あなたはいったい何者なの？」

「それはまだ答えられない」

「じゃあ、その犬は何なの？」

「この子は呪いだよ」
「呪い？」
「そう。呪いには様々な方法があり、形状も様々なんだ。この子以外にも何か見なかったかい？」
由起葉は公園で見た光景を思い出した。
「女の人におかしな影があった」
「それも呪いだ。誰かが彼女を呪ったんだろう」
「じゃああの人は呪われてるってこと？」
「そういうことになるね。影というのはなかなか凶暴なんだ。かわいそうだけどその女性は無事じゃ済まないかもしれないね。まぁ、この子に比べればマシだろうけど」
そう言って不生は犬の毛をなでた。不生は犬を呪いだと言った。ということは呪いに触れることになる。
「私、その犬が女の人の後ろについて神社の石段を降りてくるのを見たの」
「なるほど。だからこんな立派な姿なのか」
「あの人はこの犬に呪われてるの？」
「犬が呪うわけじゃない。犬は呪いの形だよ。それにこの子はまだ完成されてないみたいだから、おそらくその女性が誰かを呪おうとしているんだろう。神社に通っては誰かに対する怨みの言葉を吐き出してるんだろうね。呪いの言葉がこの子をつくり、こんなにまで成長させた。もう少し成長したら恨みの対象へこの子が向かうはずだ」
「呪われた人はどうなるの？」
「この子の場合は力が強いからなぁ。最悪は死んじゃうかもね」
「犬に噛み殺されるってこと？」
「ちょっと違うかな。この子が食らうのは人の魂であって、人そのものじゃない。よほど特殊なものでない限り、呪いは具現化しないし、見ることも触れることもできない。だから人に直接的に危害を加えることはできないんだ」

「でもあなたは触れてる。人じゃないんだ」
「おっと、なかなか鋭いな」
「そして私には見えてる。私も人じゃなくなっちゃった・・・」
「それは違うよ。君はワタシとは違う」
「ねぇ、これは夢の続きなんでしょ？あの事故でやっぱり私は死んだんでしょ？」
「君はちゃんと生きてるよ。ただちょっと、普通じゃなくなってしまったけどね」
普通じゃない。その言葉はむしろ由起葉を安心させてくれた。自分が普通でないからこんなおかしな目に合っている。充分納得がいく答えだった。
「覚えているかい、ワタシと契約したことを」
「あの黒い世界でのことね」
「そう。あのとき君はワタシに片目を差し出すことで契約を成立させた。ワタシとの契約は呪いの契約となる。つまり君の片目は呪われているんだ。だから見えないものが見えてしまう」
「ちょっと待ってよ。そんなの聞いてないっ」
「説明している時間がなかったからね。それに、聞いていたとしても君は彼を助ける道を選んだだろう？」
言い返せない。たぶん不生の言うとおりだ。
「私はこれからどうすればいいの？」
「どうもしなければいい。見て見ぬふりをして過ごせばいつもと変わらない日常を送れる。今回のように下手に呪いを意識すると自分の元へ呼び込むことになるから気をつけた方がいい」
「そうよ。なんでこの犬は私のところへ？」
「呪いというのは人の念だ。恨めしいと思う相手を苦しめるために絶対の力が向けられる。だから邪魔するものを排除しようとするんだ。君のように存在を認識できる者には邪魔される可能性があるからね。それをさせないために危害を加えに来たんだろう」
「この子は私に見られたからここに来たんだ・・・」

「君は理解が早くていいね。君みたいな賢い子から目をもらえてよかった」
「ねぇ、この犬はこのまま放したら誰かを呪いに行ってしまうんでしょ？」
「まぁ、そうだろうね」
「なんとかならないの？あなたは不思議な力を持ってるじゃない。呪いを消すこともできるんじゃないの？」
「消してどうする？」
「どうするって・・・」
「この子を消すことくらいはできるよ。でも消したところでまた新たな呪いが生まれるだけだ。この犬を連れていたという女性は相手を殺すまで恨みの心を捨てないかもしれない。だとしたら彼女の思いを遂げるまで呪いは生まれ続けることになる。終わりがないんだ」
「じゃあ、放っておけって言うの？」
「仕方ないんだよ。君は見えるというだけで何もできない。君だけじゃない。誰にもどうすることもできないんだ。呪いをかける本人をどうにかしない限りね」
由起葉は納得できない気持ちを残しながらも、それ以上何も言えなかった。
「君は賢くて清い。でも、その過剰な正義感は身を滅ぼすことにつながるよ」
「ご心配どうも」
「そうだ。この子を君にあげよう」
「えっ？」
不生が指し示しているのは、自分の下のあの犬だ。
「それ、呪いだって言ってたよね」
「そうだよ。まぁ、ペットみたいなもんだと思ってさ。ちょっとくらいのことならこの子が守ってくれるだろうから、もらっておきなよ」

由起葉の返事も待たず、不生は犬の頭に手を当てながらなにやら唱えはじめた。それが一通り済むと、由起葉の手をとる。

「さぁ、契約を」

由起葉は引かれるままに犬の口に手を軽く入れられた。そこから淡い光があふれる。不生は最後の言葉を囁いた。

「これでこの子は君のものだ。触ることもできるよ」

由起葉はおそるおそる触れてみた。本物の犬のように、ふさふさとした毛並みがわかる。これが呪いだとは信じられない。

「懐(なつ)いてると結構かわいいもんだろう。好きに呼んであげたらいいよ。じゃあ、今夜はこれで失礼するよ。まぁ、できたらもう会わないでいたいけど君はまた呼びそうだからね。そのときはまたお邪魔するよ」

不生は軽く手を振ると、瞬く間に姿を消した。

部屋が暗くなる。ぼんやりと浮かぶ白い生物。あの犬は本当に由起葉の元へ残った。

「・・・・部屋が狭いな」

犬はのんきにあくびをしている。大きなペットは部屋の空きスペースをほぼ占領していた。

2彼女の選択

夏休みは終わり、新学期が始まった。
多加弥(たかや)とは学校が違うため、しばらくお別れだ。だが、例の犬は学校までついてくる。誰にも見えない大きな犬。契約のせいだろうか、ある程度の距離以上は離れられないようだ。
犬にはナギという名をつけた。この犬が現れた場所が柳楽(なぎら)神社というので、そこからとった。
学校ではホームルームの時間に由起葉(ゆきは)の目のことが簡単に説明された。自分のことなのに、由起葉は上の空で聞いていた。
窓からグラウンドが見える。ふらふらとのんきにお散歩しているナギが見える。なんておかしな日常だろう。
「ユキハ、大丈夫なの？」　始業式がメインなので、今日は午前中で学校は終わりだ。帰る前にみんなが由起葉のところへ寄ってくる。
「言ってくれたらよかったのに」
「うん。なんて言っていいかわからなくてさ」
「困ることがあったら何でも言ってよね。助けるからさ」
「ありがと。でも私自身まだそんなに不自由を感じてないんだ。これから不便なことが出てきたら言うね」
しばらくわいわいとしゃべった後、そのままみんなと教室を出た。
校舎から出ると、ナギが寄ってきた。由起葉たちから少し離れておとなしくついてくる。こんなに大きな犬が近くにいるのに、みんなはまるで気にしていない。本当に見えないんだなと実感する。
「あっ、ユキハ、あれ」
校門の方を指差して美和(みわ)が肩を叩いた。見ると、門のところに多加弥がいる。
「わざわざお迎え？」
「約束なんてしてないのに」

「ユキハのことが心配なんだよ」
「柏井(かしわい)くぅん」
詩織(しおり)が大きく手を振りながら駆けていく。
ゆっくりと近付いてきた由起葉を見て、多加弥は気まずそうにしている。
「ごめん、みんなと帰るなら、俺はべつに・・・」
「ここまで来といてべつに帰るの？」
「でも・・・」
「わざわざ来たんだし、一緒に帰りなよ。私たちは先に帰るからさ」
「そうそう。ほら、詩織も人の彼氏にべたべたしないで、帰るよっ」
「ケイちゃん、それひどい。べたべたなんてしてないもん」
「はいはい。いい子だから帰ろうね」
小さな詩織は圭(けい)に首根っこをつかまれて引きずられていった。
残された由起葉と多加弥。急に静かになる。
「ご、ごめん」
「なんで謝るのよ」
「だって、せっかくみんなと帰ろうとしてたのに」
「そんなに気にするなら来なきゃよかったじゃない」
「それは・・・」
「冗談よ。ほら、一緒に帰ろ」
多加弥はほっとした顔で由起葉についてくる。その横にナギも並ぶ。多加弥は人でナギは呪いだが、どちらも犬みたいだと思った。
「ユキハ、不便はなかった？」
「特には。ちょっと黒板の字が見にくくなったくらいかな。でもそのうち慣れると思う」
「そっか。ねぇ、ユキハ。塾やめるって、本当？」
「・・・・うん」
それが聞きたくて来たのだろうか。由起葉は夏休み中考え続けた

結果を答えた。
「ごめんね。私なりに考えたの。事故のせいでだいぶ遅れをとっちゃったし、それに大学に行って勉強するのに私の視力ってどうなのかなって思っちゃって。やっぱり左目だけでたくさんの文字や数字を追いかけていくのに限界を感じるの。きっと、ずっとは続けられない」
「進路はどうするの？」
「専門学校に変更しようかなって思ってる。私、体動かすの嫌いじゃないし、整体とかインストラクターとか、体や手を使ってできるものを目指してみようかなって」
前向きな発言だった。無理をしているわけではない。少しでも興味のあることにつなげただけだ。
それなのに、隣の多加弥はバカなことを言う。
「俺も、やめちゃおうかな・・・」
「はぁ？」
「俺もユキハのおかげで武術とかやってるし、ユキハと同じ道に・・・」
「それ以上言ったら本気で怒るよ」
由起葉はぴしゃりと制した。
「なんでそういう考えになるのかなぁ。私の分までがんばろうとか思わないの？私だってタカヤと一緒にいたいし、同じ道に進みたいよ。けど、私なりに考えたの。たとえ道は変わっても精一杯やるから、タカヤは今までどおりがんばってよ。タカヤならできるから、こんなことで心を乱さないで」
「こんなことって・・・。俺には大事なことだったんだ」
「いつも傍にいることがそんなに大事？高校卒業したら同じ学校に行けるって、そのためだけに努力してきたの？」
「そうじゃないけど」
「ならちゃんと考えて。将来一緒になればいいじゃない」
「なっ」

「それじゃダメなの？」
冷静に言い放つ由起葉に対して、多加弥は顔が真っ赤だ。
「ユキハ、大胆だね。それってさ、要するに、プロポ・・・・やばいな、鼻血が出そうだ」
「なにバカ言ってるのよ。とにかく、わかったわね」
「うん」
素直にうなずく多加弥。本当にわかってくれたか怪しいものだ。
由起葉たちは駅前のバス停まで歩いた。学校のすぐ近くにもバス停があるが、そこから乗ると由起葉の家の方まで行けない。多加弥は由起葉と同じ街に住んでいるので途中まで一緒だが、自分の通う高校から電車で来てバスにまた乗るわけだから、本当にわざわざやって来たことになる。
バスが来た。由起葉たちが乗り込むと、ナギはあの巨体からは想像できない身軽さでバスの上に飛び乗った。朝もこうやって来た。最初見たときは声を出しそうなくらい驚いたが、さすがに二度目は慣れている。
乗客が次々と乗り込み、由起葉たちは後ろの方の席に座って発車を待っていた。すると、ドアが閉まりかけたときに一人の女の子が駆け込んできた。
由起葉と同じ制服だ。でも見覚えがない。今までバスで一緒になったことはあっただろうか。
女の子は眼鏡をかけていて、長い髪を三つ編みにしていた。胸元に名札を付けたままだ。名札に入ったラインが緑色なので一年生だとわかる。安原（やすはら）と書かれていた。
安原は息を整えるため深呼吸し、前の方の席に向かっていった。
そのとき、由起葉は目を疑う光景を見てしまった。
真っ黒な、霧のような影が急に足元からはい上がり、安原の後ろ姿を覆ってしまったのだ。安原は動く影となり席に座った。
見てはいけない。由起葉は思わず目を手で隠した。
「どうしたの？目が痛いの？」

隣の多加弥が不安げな声で聞いてくる。
「ううん、大丈夫」
そっと手を外して、もう一度見ると、黒い影はなくなっていた。
呪いだ。聞くまでもなくそう思った。

その夜、由起葉は昼間のことを思い出しながらナギの毛をなでていた。ナギは目を閉じて由起葉に身を任せている。
今ではこうして触れ合うことにもすっかり慣れてしまった。自分の順応力に驚くが、それでもやっぱりあの黒い影には慣れない。おぞましさにぞっとする。
「あの子、呪われてるのね・・・」
由起葉のつぶやきに反応するように、突然ナギが顔を向けてきた。
「なに？どうしたの？」
聞いたところでナギはしゃべれない。わかっていたが、それでも聞いたのはナギが何か言いたそうだったからだ。しばらく見つめ合う。
「私の言ったこと、何か間違ってる？」
「ガウゥ・・・」
「あの子は呪われてるわけじゃない・・・」
ナギは促すように目を細めた。
「あの子が呪おうとしてる・・・。そういうこと？」
「ガウ」
ナギはうなずく代わりに一声吠えた。
「あなたそんなことまでわかるの。賢いのね」
感心してしまう。ナギの能力はまだお目にかかったことがないが、力も強そうだし知能も高そうだ。とはいっても、呪いに知能があるのかは疑問だが。

「ナギをつれてた女の人と一緒ね。あの子の影も成長したら呪いの対象者のところへ行くんだ」
おとなしそうな女の子。静かに日常を送っていそうな彼女には、呪いを生み出すほどに憎い相手がいる。そしてその相手は、このままいけば危ない目に遭う。
「わかってるのに何もしない方がいいなんて・・・」
もし安原に呪われる相手が自分の周りの人間だったとしても同じことが言えるだろうか。見て見ぬふりなんて、できるだろうか。
「・・・・できないよね、やっぱり」
由起葉は自分の性格に少し嫌気がさした。不生(ふき)の言うとおりだなと思った。

・彼女の選択（2）

名前と顔がわかっているので探すのはそう難しくなかった。
一年二組。安原沙英（さえ）。周りの人の印象は一様にしておとなしいというものだった。目立った特徴はないようだ。
気にしているからか、呪いが引き寄せているからなのか、由起葉は度々沙英の姿を見るようになった。静かに学校生活を送っている。そんな様子の沙英は、一人でいることが多かった。
それでも決して学校が楽しくないようには見えなかった。由起葉にしてみればつまらない日常だが、彼女にとっては居心地のいいスタイルなのかもしれない。考えてみても呪いとは結びつきそうになかった。
「気のせいだったのかな・・・」
もう沙英を追いかけるのはやめようかと考えていた。あれ以来影も見えないし、沙英の周囲で呪われそうな人物も見当たらない。気のせいだったですめば、由起葉にとってもありがたい。
掃除当番の由起葉はゴミを捨てるため校舎裏に来ていた。後ろをナギがついてくる。
由起葉たちのクラスはホームルームが長引いてしまったため、掃除に入るのが遅れていた。そのため裏のゴミ捨て場には他のクラスの生徒の影もなく、静かだった。由起葉はすでに山になっているゴミの中に、自分のクラスのゴミを突っ込んだ。
そのとき、少し離れたところにある用具倉庫の陰から、小さな笑い声がした。ナギも反応してそちらを向く。楽しげな声ではなく、人をバカにしたような意地悪な笑いだった。
由起葉はそっと近付いていった。木の陰に隠れてのぞいてみると、三人の女子生徒の後ろ姿が見えた。
一人が手に持っていたジュースのパックを地面に投げつける。いや、地面ではない。そこにはもう一人女の子がいた。パックはその

子にぶつかり、中に残っていた液体が飛び散った。また笑い声があがる。
「ちょっと」
たまらず由起葉は声をかけていた。人に見られたことに驚き、三人は慌てて逃げていく。あっという間に走り去っていったので顔がよく見えなかった。
「ワンっ」
いなくなった三人の方ばかり見ていた由起葉は、後ろでナギが吠えたことにより視線を座り込む女の子に向けた。そこでぎょっとする。真っ黒だ。影が女の子を取り巻いている。
「まさか・・・サエちゃん？」
由起葉は駆け寄って肩を揺すった。
「サエちゃんっ」
黒い影の中で、女の子がぴくっと動いた。次の瞬間、地面に吸い込まれるようにして影が一気に女の子から離れていく。中から現れたのはやはり沙英だった。
はっとして由起葉を見ている沙英。その表情にほっとする。
「あ、あの・・・・あなたは・・・」
「あ、あぁ。私はえっと、通りすがりの上級生よ。それにしてもひどいね」
「・・・本当だ。ひどい格好ですね」
沙英は自分の汚れた制服を見て他人事のように言う。
「いや、格好のことじゃなくて、さっきの子たちのこと。三人で取り囲んでゴミ投げつけるなんて最低だよ」
「べつに、気にしてませんから」
「えっ？気にしてないって・・・。そんなわけないでしょ」
「私は大丈夫ですから」
由起葉は言葉に詰まってしまった。それほどまでに強く、沙英はきっぱりと言い切ったのだ。それ以上言うことは許さない。そういう目をしている。

「これ、よかったら使って。顔とかも汚れてるし」
由起葉はハンカチを差し出した。それが精一杯だった。
沙英の手にハンカチを押し込んで、由起葉はその場から去った。
今何を言っても沙英は聞いてくれない。そう思った。

由起葉は諦めたわけではなかった。あれからも沙英の姿を探しては様子をうかがっていた。
そんなある日、由起葉は人気のない下駄箱の前で怪しい動きをしている人物を見つけた。すぐに壁に隠れてこっそりうかがう。あの辺りにはちょうど沙英の下駄箱があるはずだ。
下駄箱のひとつを開けて何やらしている人物をじっと見ていた由起葉は、ある光景と重なって見えるような気がしてきた。あの後ろ姿。逃げていった三人のうちの一人ではないだろうか。
彼女は作業を終えると、周囲を気にしながらそそくさと逃げていった。
由起葉は確認しようかと一度下駄箱の近くまで寄ったが、人のところを勝手に開けることにためらい、結局そのままにして帰った。
沙英の下駄箱から大量の砂が出たのを知ったのは、次の日だった。昨日の子がやったに違いない。由起葉は人物を特定するため動き出した。
彼女を見つけるのは案外あっさりできたが、情報を得るのにてこずった。一年生との交流が浅いため情報入手のルートがない。それでもなんとか名前と沙英との関係を調べた。
大崎花恵（おおさきはなえ）。いつも三人で行動しているらしいので、校舎裏で目撃した三人は彼女たちであると言っていいだろう。花恵たちは入学当初から仲良くしていたようだが、ある頃から沙英だけ一緒に行動しなくなったようだ。それでも特別仲が悪くなったような感じはなく、

クラスでも普通にしゃべったりはしているらしい。
「女って複雑だよね・・・」
「なにを急に。あんたも女でしょうが」
思わずつぶやいた由起葉に圭の突っ込みが入る。
「私はいい仲間に恵まれてるよ」
「本当にどうしたの？そこまでしみじみ言われると、ちょっと気味悪いよ」
美和までもが怪訝（けげん）な顔をする。
由起葉は自分の知った女の友情関係について、みんなに話そうかとも思ったが、やめた。妙なことに首を突っ込んでいる自覚はある。それで周りを巻き込みたくはない。
「ユキちゃん何かあった？シオリの玉子焼きあげるから元気出して」
「はは・・・。ありがと」
由起葉は詩織の頭をなでた。こうして友達になるまでにはいろいろあった。特に詩織と圭の仲は最悪で、いじめに近いことをしていたと言っていい。さっぱりとした性格の圭は、ぶりっ娘のような詩織のことが大嫌いだったのだ。
でも、詩織のことを深く知ることで圭は全てを受け入れた。今では圭が詩織を守ってやるまでになった。
由起葉は考える。あの頃の詩織は誰かを呪ったりしただろうか。自分の置かれた境遇を誰かのせいにして、その誰かを消したいとは考えなかったのだろうか。
もしあの頃の自分に呪いが見えたら、詩織の姿は影に包まれていたのではないだろうか。
「詩織、今って楽しい？」
「うん、楽しいよ。ケイちゃんが優しくしてくれたら、もっと楽しいのに」
「なんだって？」
「きゃう」

圭に頭をぐしゃぐしゃされておろおろする詩織を、美和がよしよしする。本当にナイスな人間関係だ。

お弁当を食べ終えて、美和に髪を整えてもらった詩織は上機嫌だ。その間に圭はゴミを捨てにいって詩織のお弁当の包みもきれいに直してくれた。本当は優しいのだ。

今沙英はどんな気持ちだろう。辛いだろうとは思うが、踏み留まってほしい。由起葉はそう考えてしまうのだった。

・彼女の選択（3）

それから数日が過ぎた。
由起葉は未だに沙英のことを気にしている。その日もナギとバス停までの道を歩きながら沙英のことを考えていた。
すると、前方を歩いてゆく三つ編みの女の子が目に入った。沙英だ。バスが一緒だったことを由起葉は思い出した。
声をかけるべきか迷う。よくわからない先輩がいきなり一緒に帰ろうと誘ってきたら警戒するのが普通だ。おかしな人と思われて今後避けられても困る。
そんなことをぐるぐると考えていた由起葉は沙英がいなくなったことに気付かなかった。やっぱりもうしばらく見守るだけにしようと決めて顔を上げたときには、前方に人の姿はなかった。
由起葉たちが歩いていた道はちょうど直線になっている。脇道にそれたりしない限り、見えなくなったりしないはずだ。
（私に気付いて逃げた・・・？）
まさかと思いながら妙に胸がざわついて、由起葉は小走りで沙英の行方を探した。よほど必死で逃げない限り、今なら姿を追えるはずだ。
「ワンっ」
ナギが由起葉の前に出て誘導しようとする。沙英の居場所がわかるようだ。
「わかるの？」
由起葉はナギについて細い道に入った。そのまま少し進むと急にナギが止まったので、由起葉は勢いのままナギにぶつかった。
「急に止まらないでよぉ」
ナギが鼻の先で示す方向には沙英の姿があった。花恵たち三人と一緒だ。沙英を連れ出して何をしようというのか。由起葉は物陰に隠れて様子をうかがった。

「サエ、どういうつもり？」
「花恵が言ってる意味、わかるよね？」
「ウソつき」
「ハナちゃん、私ウソなんてついてないよ」
「じゃあなんだっていうの？昨日もジュンと一緒にいて、それを知らないとでも思ってるわけ？」
「違うの。あれはたまたま・・・」
「うぬぼれるんじゃないよ。サエなんて、何かしない限りジュンに相手にされるわけないんだから」
「いいかげん認めたら？」
なんだかややこしそうだ。沙英と淳（じゅん）と花恵。この間に何かあるらしい。
「ハナちゃん、本当に違うの」
「好い人ぶらないでよ。サエなんて大嫌い」
花恵はいきなり沙英の髪をつかんだ。そして片方の手で眼鏡を外す。
由起葉が飛び出すのも間に合わず、沙英の眼鏡は民家のブロック塀に叩きつけられてレンズが割れてしまった。
「ちょっと、何してるの」
もう少し早ければと、悔やむ気持ちを抑えて、由起葉は沙英たちの前に出た。花恵はぱっと髪を放すと、二人を引きつれて走り去った。
毎回こんなことを繰り返しているのかと思うと嫌気がさす。言いたいことを言って、物まで壊して、最低だとしか思えなかった。
由起葉は転がっている壊れた眼鏡を拾い上げて沙英に渡した。
「大丈夫？」
「ありがとうございます。私は平気です」
沙英は落ち込んだ様子もなく、しっかりと答える。
「そんなに強い心があるのに、なんであの子にはやめてって言わないの？」

「ハナちゃんは、悪くないから・・・」
「こんなことする子が悪くないっていうの？どう見たって・・・」
「ハナちゃんのこと悪く言わないでください。みんな友達なんです。本当はみんな好い人なんです」
「じゃあ、悪いのは誰なの？」
悪い人間。憎むべき相手がいなければ、沙英から呪いの影が生まれるはずがない。もし沙英の言うことが本当なら、他に誰か呪われるような人間がいることになる。
「悪いのは・・・」
沙英は手の中の眼鏡を握り締めた。
「先輩に対してこんな態度をとるのは失礼だと思いますけど、どうかもう関わらないでいただけますか。これは私の問題なんで」
由起葉はどきっとしてしまった。あまりにも強い沙英の視線。沙英の本当の姿は、地味でおとなしいなどというものからはかけ離れているのではないだろうか。
「ごめん。確かに私には関係ないことだね」
「すみません。本当は、きっと誰も悪くない・・・。難しいんです」
「そう。でも、もし今回のような場面に出くわしたら止めに入っちゃうかも。自分でも時々嫌になるんだけど、私って結構おせっかいなんだよね。だからサエちゃんじゃなくても放っておけないと思うんだ」
「程々にしておかないと、先輩にも飛び火するかもしれませんよ」
「そういうのわかってて放っておけないのが、おせっかいって言うんだよ」
沙英は少し笑ってくれた。
「私は私でがんばりますから、先輩はあまり気にしないでください。では、失礼します」
頭を下げて立ち去る沙英を見送って、由起葉はため息をついた。今行ったらバスで一緒になってしまう。一本ずらそうと考えて、由

起葉はふらふらと奥の道へ入っていき、そのまま迷ってバスを二本も逃すはめになるのだった。

・彼女の選択（4）

「ユキハとデート、久しぶりだね」
「そういえば、そうだね。こうして一緒に出かけるのは久しぶりだ」
週末、由起葉は多加弥と街まで買い物に来ていた。塾をやめてから今まで以上に会う機会が減り寂しかったのだろう。今日の誘いを受けて、多加弥は飛び上がりそうなくらい喜んでいた。
こうして街中に出てみて、改めてナギの存在に違和感を覚える。他の人には見えないし触れることもない。ナギはあえて電線を伝ったり、建物の上を通ったりして人を避けているが、仮に道のど真ん中を歩いたとしても、すり抜けてゆくだけで大丈夫なはずだ。
わかってはいるのだが、街中を行くナギの姿はやはり異様である。今もファーストフード店のガラスの前に行儀よく座っているのが見えるのを、由起葉は店内からつい気にしてしまっていた。
「ユキハ、なんか用事でもあるの？そわそわしてるみたいだけど」
「えっ？ううん」
「服も買ったし、何かあるなら帰ろうか」
「ごめん、違うの。なんでもな・・・」
うまい言い訳も浮かばず、逆におろおろしてまたナギの方を見てしまった、ちょうどそのとき。店の前を通り過ぎる一人の女の子を目撃し、由起葉は思わず立ち上がった。
「どっ、どうしたの？」
女の子の後ろを追いかけるようにして一人の男の子が通り過ぎてゆく。おとなしく座っていたナギが反応したのを見て、由起葉は躊躇いを捨てた。
「ごめん、タカヤ」
「えっ？ちょっ、ちょっと」
多加弥を置き去りにして由起葉は店の外へ飛び出した。ナギがす

ぐに寄ってくる。人は多いがまだ見失うほど離れてはいなかったので、由起葉は彼女をすぐに目で追うことができた。

「サエちゃん、だよね？」

小声で聞くとナギは見返してきた。間違いなさそうだ。由起葉は二人の後を追いかけはじめた。

沙英はいつもとは雰囲気が全然違っていた。髪をおろし、眼鏡を外して化粧をした彼女は、顔立ちのはっきりとした派手目の美人だった。一度眼鏡のない沙英の顔を見ているのでかろうじてわかったが、それでも本人かどうか自信がなかったくらいだ。

どちらが本当の沙英の姿なのか。もしどちらかが偽りだとするならば、何のために装っているのだろうか。

由起葉は二人の後を追う。二人は街中をずっと同じ距離を保ったまま歩いていく。なんだか妙だ。沙英は後ろの男の子を振り切って逃げるわけではなく、男の子の方も急いで追いつこうとするわけではない。

追われている、追っている、という感覚よりも、それ以上近付けない何かがあるだけで一緒に歩いている、そんな感じがする。

ふいに沙英が大通りから外れた。男の子もついていく。もちろん由起葉も追いかける。沙英は躊躇うことなく、そのまま進み続ける。

人気のなくなるところまで来て、沙英は急に歩みを止めた。由起葉は慌てて電柱の陰に隠れる。堂々としていても見えないナギがちょっとうらやましかった。

「あのさ、どこまでついてくるつもり？」

沙英の不機嫌な声に、どきっとしてしまう。だがそれは、もちろん由起葉に向けて言われたのではなく、男の子に対して言われたのだ。

「安原、オレ・・・」

「もう私に関わらないでよ。私は今のままでいいの。ジュンのことなんて好きじゃないし、何度言われても変わらないから」

びっくりするほど強気な沙英に押されているのは、あの日話題に

出てきた淳という男の子だった。どうやら淳は沙英のことが好きらしい。
「安原。それ、本当の気持ち？」
「しつこいな。うぬぼれないでよ。ジュンには私よりハナちゃんの方がお似合いだよ。私はもうジュンの知ってる私じゃないの。過去の私が好きなだけなら、さっさと諦めた方がいいよ」
「安原は安原だよ。今だって変わらない。ただちょっと、今は抑えられてるだけで・・・・」
「誰のせいだと思ってるのよ」
沙英は淳をにらみつけた。怒りと憎しみ。由起葉の背もぞわりとする。
「誰のせいで変わらなきゃいけなくなったと思ってるの。毎日辛い思いをして、自分を変えることでやっとつかんだ楽しい時間だったのに、ジュンのせいでまた逆戻りだよ。彼氏なんかいらない。本当の自分なんていらない。だから私に関わらないで。平穏な日々を返してっ」
ぶわっと、足元から影が溢れだした。呪いの相手はおそらく淳だ。もしここで呪いが完成してしまえば、目の前の淳に襲いかかるのは避けられない。
沙英を止めるしかないと意を決したとき、ナギが素早い動きで沙英の影に飛び掛かった。もちろん由起葉にしか見えない。影はナギの攻撃を受けて、逃げるように沙英の足元に消えていった。
「ナギ、やるじゃない」
戻ってきたナギを小声で褒める。でもこれは一時的なものにすぎない。呪いを完全に消したわけではないのだ。
「オレは安原が好きだ。だからなんとかしてやりたいんだ」
「そう思うなら私の前から消えて。ジュンにはわからないだろうけど、やっとできた友達なの。自分なんかなくても楽しい時間がある方が幸せなの。もう壊さないで」
沙英は走り去ってしまった。淳はもう追いかけることなく、黙っ

て後ろ姿を見つめていた。
「ユキハ、いつから探偵になったの？」
突然後ろから声をかけられて、由起葉はぎゃっという妙な声と共に電柱の陰から飛び出してしまった。
「タカヤっ」
沙英に夢中になって忘れていた。よくよく考えればひどい話だ。デート中に彼氏を置き去りにして、そのことも忘れているなんて。
だが、当の本人は特に気にする様子もなく、由起葉が置いていった荷物を片手に微笑んでいる。
「あの・・・」
はっとして見ると、淳が不思議そうな顔をして立っていた。見つかってしまった。非常にバツが悪いが、多加弥を責めても仕方がなく、由起葉は淳に全てを話すことにした。

・彼女の選択（5）

「ごめんねユキハ。邪魔するつもりじゃなかったんだ」
三人で公園に向かう途中で、多加弥が小声で謝ってきた。
「謝るのは私の方だよ。いくらなんでも置いてくなんてひどいよね」
「急いでたんなら仕方ないよ」
そこは怒ってくれてもいいのになと思う。多加弥はお人好しだ。そのせいで悪いことに巻き込まれやしないかと心配してしまうくらいに。
公園に着いてベンチに座ると、由起葉は自分の見た沙英と花恵の関係を淳に話した。とはいっても、あまり情報は多くなく、淳はすでに知っているようだった。
「安原を助けてくださったんですね。ありがとうございました」
「いや、ほとんど間に合ってなかったけどね」
ジュースもかけられたし眼鏡も壊されてしまった。助けたというにはちょっと力不足だ。
「サエちゃんは花恵ちゃんたちと仲良くしたいみたいだね。あんなにひどいことされてるのに、悪く言わないでって怒られちゃったよ」
「安原にとってはやっとできた友達だからなんでしょう」
「友達いなかったの？確かに学校では静かで地味な感じだけど、それだけで友達ができないとかある？」
「安原は今はあんな感じですが、中学のときは全然違ったんです。むしろ中学のときの方が本当の安原に近かった。今の姿は偽りなんです」
中学時代の沙英はとても華やかで、周りの目を引く存在だったらしい。生まれ持った容姿と能力。そして誰に対しても変わらない優しさが沙英の人気を不動のものとした。沙英はいつも友達に囲まれ、

楽しい中学生活を送るはずだった。
しかし、徐々に歯車は狂いだした。沙英にその気がなくても、周りの目が変わってしまってはどうしようもない。中学生という難しい年頃の心の変化を、沙英一人ではどうすることもできなかった。
「誰にでも優しかったのが逆にいけなかったんですかね。勘違いする奴も多く出てきて、男子のほとんどは安原をただの友達とは思ってなかったと思います」
そして不幸は始まりを告げる。一人の男子生徒の告白を皮切りに、沙英は恋愛競争の渦中に放り出されることになった。それだけでもこたえていた最中、大きな事件が起こる。
学内で名の知れていた三人の先輩から続けて告白されたのだ。沙英は全ての申し出を断った。だが、それで事が済むわけがなく、後日沙英は女子の先輩たちに取り囲まれ暴力を受けることになる。
「オレが駆け付けたときには安原は階段の下で倒れてて、逃げていく何人かの先輩の姿が見えました。詳しい経緯はわかりませんが、もみあっていて階段から落ちたみたいで、安原は腕を折って入院しました」
その後淳は何度かお見舞いに行ったが、女友達は誰一人来た様子がなかった。
沙英は事件の詳細を決して語らず、階段で滑って落ちたという説明を繰り返した。淳は違うことを知っていたが、沙英の強い姿勢を見て何も言うことができなかった。
「退院して学校に来たときにはもう、安原の居場所はなくなってました。みんなが安原をねたんでたとは思えないし、女子の中にも仲良くしたい子はいたと思うんです。でも周りが怖くてできなかった。女子がそんなだから男子は安原を守ろうとして、逆に状況を悪化させてしまった。安原は望んでもいない好意のせいで完全に孤立してしまったんです」
「女って怖い・・・」
そういうあんたも女でしょうが。圭の突っ込みが聞こえた気がし

た。
「でも、安原はそれからもずっと学校に来てました。卒業するまで環境は良くならなかったけど、負けずに一人でがんばってたんです。オレはそんな安原が好きだった。強くて優しくて、ただ遠くから見守るしかなかった勇気のないオレと違って、すごく輝いてる安原が好きだったんです。いつか安原はこんな陰気な世界から抜け出して、誰からも愛される人になる。そう信じてました」
淳の口からこぼれるのは沙英への愛ばかりだ。こんなにも好きなのに、今淳は沙英に呪われかけている。なんと皮肉な話だろう。
「ジュン君はサエちゃんのことが本当に好きなんだね」
「はい。恥ずかしいですが、それは自信を持って言えます」
「結構積極的に迫ってたよね」
「本当はそんな大胆なこと軽くできるような人間じゃないんです。安原への気持ちだって自分の内に秘めておくつもりだったし。でも、高校での安原の姿を見たらたまらなくなって・・・」
淳は急に泣きそうな顔になった。
気持ちを察することはできる。華やかで強く輝いていた沙英が、周りを気にして目立たないように姿を変えた様を見て、淳は胸が詰まったことだろう。誰からも愛されるはずだった本当の沙英は、自らの手で押し込められ世間に姿を見せなくなってしまった。
「今度こそオレが守るんです。安原は安原らしく生きるべきだし、あんな風に偽らなくても本当の姿を受け入れて友達になってくれる人はいるはずだから。オレは自由に生きてほしいだけなんです」
気持ちはよくわかった。だが、その願いが今沙英を苦しめている。
この問題に完璧な解決は望めないだろう。手に入れるものと諦めるもの。沙英にできるのは後悔のない選択だけのように思われた。

淳を駅まで送った帰り道。由起葉は隣の多加弥が気になって仕方がなかった。まったくしゃべらない。何かを考えているのは明らかだった。

由起葉はただ黙々と歩きながら、多加弥から話しかけてくるのを待っていた。

「ねぇ、ユキハ」

多加弥が口を開いた。

「うん？」

「やめてほしいって言っても、無理だよね」

多加弥が何のことを言っているのかはすぐにわかった。沙英の問題に首を突っ込んでいることを言っているのだ。

「怒ってるの？」

「怒ってはいないよ。ユキハの優しいとこ好きだし。でも心配にはなる」

「ごめん」

「いや、いいんだ。ユキハが放っておけないのはよくわかってるし。ただ、もしユキハまで巻き込まれたらって思ったら。俺は傍にいないし」

多加弥は何のことを言っているのだろう。由起葉までもがいじめの対象にならないかを心配しているのだろうか。それとも呪いのことを何か感じているのだろうか。

後者はあり得ないと思いながらも、由起葉は少しどきりとした。

「まぁ、傍にいたからって俺じゃ何もできないかもしれないけどね」

「そんなことないよ」

由起葉は多加弥との距離が広がっていることに今気付いた。自分だけが見えるモノ。自分だけが知っていること。多加弥の入り込めない世界を自分は持ってしまったのだ。

全てを打ち明けて秘密を共有すれば、多加弥の抱いている焦りのような気持ちは和らぐかもしれない。でも、それでどうする。結局

は見えないのだ。今度は見えないということが多加弥を焦らせてしまうかもしれない。
呪いなんて関わらない方がいい。知らない方がいいことだってある。
「俺にできることって何かある？」
「あるよ。私のこと、離れてても想ってて」
「想ってるよ、いつも」
「それでいいよ。私はタカヤに想われてるんだって思ったら、それだけでうれしいし強くなれる。私はタカヤがタカヤでいてくれればいいんだ。タカヤに何かしてほしいなんて、本気で思ったこと今までにもないよ」
「欲がないね。俺はユキハにしてほしいことといっぱいあるよ」
「な、何よ」
「あんなことや、こんなこと・・・」
「あんたねぇ」
由起葉は多加弥の耳を引っ張ってやった。多加弥は痛がりながらも笑っている。
（ごめんね、タカヤ）
「大丈夫だよ」
心の中の声に多加弥が反応したのかと思い、由起葉はびっくりした。
「ユキハには無茶しないでほしいけど、でも、なんとなくユキハが本当に危ないときには傍にいれる気がするんだ」
「また適当なこと言って。・・・でも、ありがとう」
何もしないのが一番いいのかもしれない。自分が危ないことをすれば、いつかは多加弥も巻き込むことになる。
わかってはいる。わかってはいるけれど・・・。
（やっぱり放っておけないんだ）
夕日に照らされて浮かんだ二つの影は、しっかりと手をつないでいた。

・彼女の選択（6）

この問題にケリをつけなければならない。呪いの進行度合いを見ても、もう時間がないのは明らかだった。

あの影が淳に何をするのかはわからない。だが、どうなるにせよそれは、決して沙英自身望んでいないはずなのだ。怒りの矛先が間違った方向に向いていることに、沙英はまだ気付いていない。

「終わりにしなきゃとは思っても、何をどうすればいいのやら」

由起葉にできることといえば、沙英を説得することくらいだ。花恵たちの方をなんとかすることもできるが、沙英自身が考えを変えてくれないと、この問題は解決しない。

由起葉はいつ、どのタイミングで沙英に接触しようか考えていた。

「困ったなぁ」

帰ろうと廊下を歩いていた由起葉の元へ、ナギが急いで寄ってきた。気にせず歩く由起葉の制服の襟（えり）を器用にくわえて引っ張る。セーラーの襟を引かれて由起葉はよろけた。

「ちょっと、ナギは見えないんだから変に思われるでしょ」

小声で叱るがナギはやめない。

「どうかしたの？」

ナギは上の方を示している。上の階に何かあるのだろうか。

由起葉はナギに先導されるまま階段を昇っていった。上の階に来たが、特に変わったものはない。由起葉はきょろきょろしていたが、反対側の校舎に人の姿を見つけると、急いで校舎間をつなぐ通路を渡った。

見えたのは沙英とまたあの三人だ。この子たちは淳なんか本当はどうでもよくて、沙英をいじめたいだけなんじゃないだろうかと思えてくる。

特別授業のとき以外はほとんど使われない教室が並ぶこの階の北側校舎は、人の気配もなく由起葉はさすがに堂々と近付くことはで

きなかった。
なんとか会話の聞こえるところまで行きたい。由起葉は諦めきれずに近くの教室に飛び込んだ。そのままベランダに出て、ベランダ伝いに沙英たちのいるすぐ傍の教室まで移動する。一つ一つ窓の鍵を確かめてゆく。なんと、運のいいことに一つだけ鍵のかかっていないところがあった。
由起葉は音を立てないように気をつけながら、窓から教室に入り、廊下側のドアまで近付いた。ほんの少しドアを引いてみる。隙間から沙英たちの姿が見えた。
（タカヤの言うとおりだな。私、いつから探偵になったんだろ）
自分の行動に呆れる。端から見たら怪しい姿だ。
「サエ、これ何か知ってるよね」
「それ・・・私の」
「そう、サエの。これ、自分で買ったの？」
花恵の手にはブレスレットタイプの腕時計があった。女の子らしいアクセサリーに近い形の時計だ。
「そんなわけないよね。だってサエには似合わないもん」
「ねえ、サエ。この時計私にちょうだいよ」
「えっ」
「なに？嫌なの？どうせ使ってないならいいじゃない」
「・・・・」
沙英の表情が強ばった。対する花恵の声には明らかな苛立ちが表れていた。
「サエ。私ウソつきって嫌いなの」
「ジュンとはなんでもないって言わなかったっけ？」
「ジュンのことは関係・・・」
「ないわけないよねっ。もし関係ないっていうなら、なんでジュンからもらった時計大事にしてんのよ。私が知らないとでも思ってるの？」
「ハ・・・ハナちゃん・・・」

沙英の声はすがるように震えていた。
由起葉は目の前が一気に開けたような気分になった。沙英はやはり淳のことを本気で嫌ってはいなかった。もし障害がなければ、きっと淳のことも大切にしたいはずだ。それが事実なら、沙英の選ぶものはもう決まっているのだ。
「なんでもないフリして時計までもらって」
「ハナちゃん」
「私にくれないって言うなら、こんなもの捨ててやるっ」
花恵は窓を開けると、外に向かって時計を投げた。
「あっ・・・」
沙英が飛び出すよりも早く、由起葉はドアを壊さんばかりの勢いで開けて窓に向かって一直線に飛び出した。ただ時計だけを追いかけて必死に手を伸ばす。
（つかんだっ）
手応えを感じ喜んだのも束の間。由起葉の体は支えきれずに窓の外へ躍り出た。
「先輩っ」
「うそっ」
窓の外は中庭だ。打ち所が悪ければ間違いなく死ぬ。ここは三階なのだ。
自分の行き過ぎた行動を後悔しながら、由起葉は重力にそって落ちていった。
（このままじゃ私・・・）
ぐっと目を閉じた瞬間、由起葉の体は何かに当たった。柔らかくてふさふさしている。
「ナギっ」
主のピンチを救うべく、ナギが下になって受けとめてくれたのだ。衝撃は吸収され、由起葉はナギの背から転げ落ちてしりもちをつく程度で助かった。
妙な落ち方になってしまったが、一瞬のことなので誰も気付かな

かっただろう。
「イテテ・・・」
座ったまま腰をさする由起葉のもとへ、見ていたのか生徒が集まりだした。その輪を割るように押し退けて、沙英が駆け寄ってくる。由起葉が落ちたのを見て、慌てて降りてきたのだろう。
「先輩っ。大丈夫ですか？」
「サエちゃん。まぁ、なんとか」
由起葉は苦笑いを浮かべながら時計を差し出した。
「はい。大事なもんなんでしょ。壊れなくてよかった」
「な、何してるんですかっ。そんなもののために」
「そんなものってことはないでしょ」
「壊れたって、捨てられたってよかったんです、ジュンからもらったものなんて。こんな危ないことしてまで守るものじゃないんです」
喜んでもらえると思いきや、沙英は時計を受け取ることさえせず暴言を吐き出した。ここまで頑固にこられると由起葉もいいかげん本音を言わざるをえなかった。
「サエちゃん。あのさぁ、いいかげん目覚ましたら？」
「どういう意味ですか」
「あれのどこが友達なんだって話。見る目ないにも程があるでしょ。サエちゃんが大事にしなきゃいけないのは本当に花恵ちゃんなの？サエちゃんのことずっと見てくれてる人がいるんじゃないの？」
「先輩にはわからないですよ・・・」
「あぁ、わからないね。私はサエちゃんみたいに考えたことないもの。だからサエちゃんの気持ちなんて知らない。けど、自分の気持ちならわかるよ。私はありのままのサエちゃんが好きだ。華やかで強くて、自由なサエちゃんが見たい。だからそんなサエちゃんを傷付ける花恵ちゃんたちは私の敵だ。そして今も昔も変わらず見守り続けてきたジュン君は私の味方だ」
「ジュンは・・・」

「なに？ジュン君さえいなければうまくいったとでも思ってるの？」
「ジュンがハナちゃんのこと好きになってくれたら、みんな仲良くいられるんです」
由起葉は思わず沙英の胸ぐらをつかんで引き寄せた。
「いつかわかってくれると思って黙ってたけど、あんたはどんだけバカなの？本当に好きならサエちゃんに嫌がらせなんかしないで、ジュン君に振り向いてもらえるよう努力するのが普通でしょ。それもしないで手に入れようなんて、花恵ちゃんの思いが本気だとは思えないよ。サエちゃんだって本当は気付いてるんじゃないの？」
「やっと・・・できたのに・・・」
沙英は泣いていた。由起葉はかまわず、突き放すように手を離す。そして強引に手を持ち上げると時計を押し込んだ。
「サエちゃんは一人じゃない。少なくとも私がついてる。サエちゃんががんばれば、ほしかった本当の友達がきっとできるよ。昔はダメでも、ここでならできるよ」
泣いている沙英を残して、由起葉は立ち去った。あとは沙英の決めることだ。

・彼女の選択（7）

次の日のことだった。
寝覚めが悪くもやもやしていた由起葉が教室に入るなり、美和と詩織が飛びついてきた。
「ユキちゃん、見た？」
「何を？」
「すごいわよ」
「だから、何が？」
要領を得ない会話で先に進まない。
「あんな一年、いたっけ？新顔か？」
後ろから入ってきた圭が話に参加する。
「一年？」
「ケイも見たの？」
「たまたま。下で一年が騒いでたし、何かなと思って」
「みんなぁ、私だけついていけてないんですけど・・・」
今この学校で何かが起こっているらしいのだが、由起葉にはまったく見当がつかなかった。沙英のことを考えていて周りが見えていなかったのだろう。みんなが目撃しているというのに、由起葉だけ騒ぎにも気付かなかった。
「いったい何が・・・」
「あっ。ユキちゃんっ」
いきなり詩織が激しく肩を叩いてきた。口をぱくぱくさせながら必死で廊下を指差している。
由起葉は首を傾げながら廊下の方へ目を向けた。そこに立っている人物を見て、目を丸くする。
「先輩」
「さ、サエちゃん」
教室の入口に沙英が立っていた。由起葉のよく知る姿ではなく、

本来の魅力あふれる姿で沙英は微笑んでいた。
「どうしちゃったの？」
「目を覚ませって言ったの、先輩じゃないですか」
髪をほどき眼鏡を外して薄く化粧をしている。丈を短くしたスカートからは形のいい足が伸びていた。そこまで大きな変身をしたわけではない。だが、自信を持った沙英の表情は、まるで別人のように輝いている。
「これ、返し忘れてたんで。ありがとうございました」
沙英はハンカチを差し出した。由起葉も忘れていた。そういえば校舎裏で、汚れた沙英の手に自分のハンカチを押しつけたのだ。
「これをわざわざ・・・」
受け取るとき、由起葉は沙英の腕にあの時計があるのを見つけた。
「それ・・・」
「先輩が必死で守ってくれたものですから。ジュンともちゃんと向き合います。恋愛感情はまだないけど、私のこと思ってくれてるのはわかるし、大事にしなくちゃいけない人だっていうのもわかったから」
「花恵ちゃんのことは？」
「今すぐにはどうにもならないと思います。ハナちゃんたちに恨みはないけど、もしこのまま関係が戻らなくても、もう執着するのはやめようかなって思います。この姿を受け入れてもらって、やっと本当の友達って言えるんだって気付いたから」
「そうだよ。サエちゃんは今の方がいいよ」
「ありがとうございます。これでまた一人になっちゃうかもしれないけど、今度は怖くないです。だって、先輩もジュンもいてくれるから。信じていいですよね」
「もちろん。なんならここにいるみんなも含めてサエちゃんの味方だよ」
由起葉は傍にいた三人を引っ張り寄せた。
「おいおい、急だな」

「シオリはいいよ。サエちゃんだっけ。すごくかっこよくて素敵だよ」
「なんかよくわかんないけど、ユキハの友達なら私も仲良くするよ」
「ありがとうございます」
にっこり笑う沙英は本当に魅力的だった。
その日のうちに沙英の周りには人があふれ、校内でも有名になってしまった。逆に花恵たちは影を潜め、近寄ることすらできなくなったらしい。
淳と沙英が今後どうなるかはわからない。だが、今の沙英なら迷わずに進めるだろう。

3蛇と呪いと契約と

「さてさて、どうしたもんかね」
「いやいや、あんたがどうしたもんかでしょ。人の部屋に突然現れないでよね」
風呂をすませ部屋に戻って明かりをつけると、ナギの上に不生(ふき)がいた。今回は呼んだ覚えがない。
「私呼んでないんですけど」
「まぁまぁ。女の子の部屋に勝手に入ったのは悪いと思ってるよ」
あっさり。絶対に悪いと思っていない。
「それにしても、君は無理がすぎるね」
由起葉(ゆきは)はどきっとした。沙英(さえ)のことを言っているのだろう。
「正義の味方にするために君と契約したわけじゃないんだが」
「わかってるわ。でも、見えたから助けたわけじゃない」
「確かに、君の性格からしたらそうだろうね。けど、見えなければそもそも彼女に関心を持ったかどうか」
それを言われると言葉に詰まる。
「この子がいなかったら、今頃君は大変なことになっていただろうね」
「ナギには助けられたわ・・・」
「ナギという名にしたのか。なかなかいい名前だ」
不生はナギの頭をなでた。
「ねぇ、フキ。私、見て見ぬふりなんてできないよ。全然知らない人だって、見ちゃったらやっぱり気になると思う」
「人選ミスかな・・・。もう少し無関心な子と契約すればよかった」
「なによ。私から眼をもらえてよかったとか言ってたくせに」
「君の光自体はかなり好きだよ。ワタシとしては君のような子と契約できてうれしい。だからこそ心配してるんだ。そうじゃなきゃ、

わざわざ呼ばれてもいないのに出てきたりしないよ。普段なら呼ばれても出ていかないこともあるのに・・・」
「呼ばれたら来るのがマナーとか言ってなかったっけ？」
「そうだな。呼ばれたら行くのがマナーだ。ワタシもそう思う」
何が言いたいのかわからなくなってきた。
「とにかくだ。君はもう少し自分を大事にしなければいけないよ。君にできるのは見るということだけだ。その結果首を突っ込むことになっても、今回のようにうまくいくとは限らない。気付いたときには君だけじゃなく、大事な彼も巻き込まれているかもしれない」
「タカヤのことは私も考えてないわけじゃないの・・・」
自分のことをいつも心配してくれる多加弥（たかや）。もし自分の傍にいることで多加弥に呪いの影響があったりしたら。そのとき由起葉には守る術がないことくらいわかっている。
「タカヤは関係ないんだもんね・・・」
「君は大事なことを忘れているようだ」
「大事なこと？」
「彼が君のことを気にしているのは、恋人だからという理由だけではないはずだよ。関係ないなんて、まさか、関係大有りだよ。だって彼には君の魂が宿っているんだから」
「あっ・・・」
「君に危険が及べば、少なからず彼にも伝わる。そして、君が死ねば当然彼も死ぬ。君たちはもう、二人で一つなんだよ」
「そういう・・・ことなのね・・・」
初めて知ったことではない。だが、そんな風に言われることは衝撃だった。多加弥とのつながりは、もう今までとは違うのだ。
少しくらい危ない目に合ったとしても・・・。それは多加弥を危ない目に合わせたとしても、に変わるのだ。自分が危険に飛び込むのは、多加弥を危険に飛び込ませるのと同じ。今まで突っ走ってきた由起葉には重い足枷（あしかせ）だった。
「彼は君にだけはとにかく真っ直ぐだ。魂を分け合う前からそれ

は変わらない。君のすることに彼は寄り添うだけ」
「そう・・・。タカヤは私を、きっと止めない」
「苦しめるつもりで言ってるんじゃないんだ」
「わかってる。・・・わかってる・・・」
二人分の命を背負っているという自覚。責任の重さを考えると頭痛がした。
「もうあまり無茶をしないでくれることを祈るよ。じゃあ、失礼するとしよう」
不生は立ち上がった。
「フキ」
「なんだい？」
消えようとする不生を由起葉は呼び止めた。
「私は・・・私はたぶんどうしようもない子なの・・・」
「・・・・」
不生は由起葉の頭に手を伸ばすと、ぽんぽんと優しく手を置いた。
「そうかもしれないな。まぁ、君に呼ばれたら出てくるのは、守るべきマナーとしておくよ」
不生は優しく笑うと姿を消した。

・蛇と呪いと契約と（2）

「ユキハ？」
のぞきこんでくる多加弥に気付いてはっとなる。
「どうしたの？サエちゃんのことが解決して喜んでると思ったら、最近また考え事してるみたいだし」
「ごめん」
「謝ることはないんだけどさ。俺じゃ力にはなれないことなの？」
もうすぐ多加弥の家だ。一緒に帰るときはいつも、多加弥が由起葉の家まで送ってくれるのだが、今日は由起葉からの申し出で多加弥の家まで向かっていた。
「うまく言えなくてごめんね。でもタカヤにはもう充分力になってもらってるんだ。だからこれ以上いろいろしようとか思わなくていいから」
優しさは時に人を傷付ける。多加弥の優しさは由起葉を苦しめ、由起葉の優しさは多加弥を突き放してしまう。
恋人同士のすれ違いとは質が違うが、このままでは心が離れてしまいそうだ。傍にいたいのに、相手を思うがゆえに近付けなくなってしまう。
「ユキハ、俺・・・・うわっ」
角を曲がったときだった。由起葉に気をとられていた多加弥は、何かにぶつかってよろけた。側ではどさっという音がして、由起葉の前に女の子が倒れこんできた。
「ご、ごめん。大丈夫？」
「はい。すいません、ちゃんと見てなくて・・・・って、タカヤお兄ちゃん？」
「梢（こずえ）ちゃん？」
どうやら二人は知り合いらしい。
「結構勢いよく当たったけど、本当に大丈夫？」

由起葉は手を差し伸べた。大丈夫ですと言いながら梢も手を伸ばす。その瞬間、カーディガンの袖から出た白い腕に、由起葉は見てはいけないモノを見て思わず引き寄せた。
「どうしたのっ、それ」
「えっ？えっ？」
由起葉は右手首の辺りをじっと見つめている。
「あ、これはちょっと前にできた痣(あざ)で、今ぶつかったせいじゃないですよ」
「そういうことじゃな・・・」
そこではっとした。一度目を閉じてから、もう一度改めて見てみる。梢の言うとおり、それはただの痣だった。
「あぁ、そうなんだ・・・」
由起葉は手を放した。
「ところで二人はどういう関係なの？」
「梢ちゃんとは近所なんだ。梢ちゃんは一人っ子だから、昔はよく俺の姉さんと三人で遊んでたんだよ」
「だからタカヤのことお兄ちゃんって呼んでるんだ。梢ちゃんは今いくつ？」
「十二歳です。来年中学生になります」
「一緒に遊んでた頃からみると、ずいぶん大きくなったよね」
「日々成長してますから」
にこっと笑う顔はやはりまだあどけなく、ピンク色の頬がなんとも可愛らしい。全体的に色素が薄いのか、肌の色は白く、瞳の色も髪の色も黒というよりは茶色に近かった。
「タカヤお兄ちゃんの彼女さん、だよね？」
「うん。俺の大事な人」
小学生を前にして何を言っているのか。由起葉は急に恥ずかしくなった。
「岬(みさき)由起葉です。改めてよろしくね」
「ユキハさん」

梢は確認するように復唱した。そしていきなり由起葉の手を取ると、ずいっと寄ってきた。びっくりした由起葉は思わず体を引いてしまう。梢はそんなことにはお構い無しだった。

「あなたがいてくれなかったら、きっとタカヤお兄ちゃんはあの頃のままだったと思います。タカヤお兄ちゃんを変えてくれて、本当にありがとうございます」

「梢ちゃん・・・」

「詳しい話を聞いたわけじゃないんですけど、タカヤお兄ちゃんが変わったのは彼女さんができてからだって知って。その人がどんな人なのかわからなかったけど、きっとステキな人だろうなって思ってたんです」

「私はタカヤに何かしたってわけじゃないよ。ただきっかけを与えただけなの」

「なんでもいいんです。私はタカヤお兄ちゃんに昔みたいに優しくなってほしかったから・・・。タカヤお兄ちゃんが恐くなって、周りの人にももう遊んじゃダメって言われて、昔みたいに仲良くできなくなってすごく悲しかったんです。でも今のタカヤお兄ちゃんならまた前みたいに一緒にいられます。お父さんもお母さんもダメって言わないし、また家に来てもらってもいいって言ってます」

「本当？」

「はい。本当はもっと前から言われてたけど、なかなか会えなかったし、わざわざ会いにいくのもなんか恥ずかしくて」

「そうなんだ。うれしいよ。また遊びに行かせて」

「はいっ。あ、ぜひユキハさんも一緒に来てください」

「ありがと。機会があれば、ぜひ」

失礼します、と頭を下げて梢は走っていった。後ろ姿がとてもうれしそうだった。

「あんないい子まで悲しませてたとは・・・」

「あのときの俺は何も見えてなかったんだよ」

由起葉は改めて多加弥を見つめる。由起葉が初めて出会ったとき

のギラギラとした、行き場のない怒りを押し込めたようなオーラは今はない。本当に変わったなと思う。
でも、あのときの多加弥も今の多加弥も、どちらも本物だと由起葉は思う。怒れる心を、ただ鎮め《しずめ》ておく術を得ただけだ。多加弥の心は優しすぎるがゆえに荒れ狂い、強すぎるがゆえに暴れだす。心自体がなくなったわけではない。だから多加弥は今までの全てを内に秘めて立っているのだ。
「今は見えてるんでしょ？だったら無くしちゃダメだよ、いろんなもの」
「うん。たぶん、大丈夫」
「なんでたぶんなのよ。そこは自信を持って言い切ってよね」
「わかってるよ。だから・・・・」
多加弥は真っ直ぐに由起葉を見つめた。
「だから不安にさせないで」
由起葉はどくんっと心臓が鳴るのを感じた。

いったい何度ため息をついただろう。ナギが心配するように顔を寄せてきた。
「ナギ・・・。どうしたらいいんだろ、私・・・」
今日のことが気になってなかなか眠れない。
「見えちゃったんだよ、また」
由起葉はナギに抱きついて顔を埋めた。今度こそ関わらないでおこうと思ったのに、よりによって多加弥とつながりのある人物に呪いの気配を感じてしまうなんて。
梢の白い腕にできた痣。あれはただの痣ではない。由起葉には見えたのだ。そこに蛇（へび）の跡があるのを。
「放っておいたらどうなっちゃうんだろう。蛇なんて、きっと危

ないタイプの呪いだよね。フキならわかるんだろうけど・・・」
呼ぶわけにはいかない。呼べばきっと関わるなと言われる。
わかってはいるのだ。見て見ぬふりなんてできないことも、関われば今度こそ多加弥を巻き込むことも。
そして、多加弥も何かに気付きはじめている。由起葉を見る目に不安の色が濃く浮かぶようになった。このまま何も知らせずに押し通すことは難しいのではないだろうか。
「どうしたらいいのかわかんないよぉ」
由起葉は苦しみで胸がつぶれそうだった。泣くつもりなんてなかったのに、涙がにじんでくる。
そのまま眠ったようだが覚えていない。目覚めたときにはちゃんとベッドの中にいて、傍には変わらずナギがいた。

・蛇と呪いと契約と（3）

気分が晴れない。多加弥に会いたかったが、会っても楽しい笑顔なんて見せられる自信がない。由起葉は一緒に帰ろうという連絡を入れられずに一人悩んでいた。

「ユキハ、どうかした？」

休み時間、美和（みわ）がそっと隣にやって来た。美和は周りの変化に敏感で、落ち込んでいたり、元気がなかったりする人をさり気なく励ますのがうまい。人の問題に首を突っ込むようなことはせず、ただそっと寄り添って優しい言葉をかける美和の存在は、知らぬ間に小さな世界に調和をもたらしている。

「ミワっち・・・」

「らしくないぞ。さては柏井（かしわい）君と何かあったな」

「なんでわかるのぉ」

情けない声が出た。美和は穏やかに微笑んでいる。

「ねぇミワっち。好きな人とだったら、なんでも分かち合わなきゃいけないのかな」

「うぅん・・・。絶対ではないと思うけど」

「今までだって、何でもかんでも打ち明け合ってたわけじゃないんだ。お互い知らないところでそれぞれ悩んでたりもしてたと思うし。でも、相手が知りたいと思うことを隠したことはなかったの。タカヤを自分の世界から追い出したことなんて、一度もなかった・・・」

もう戻れないんじゃないかとさえ思う。秘密がどんどん膨らんで、抱えきれなくなったら全て話せるだろうか。そうなる前に二人の関係は崩れてしまっているのではないだろうか。

「ユキハ」

うつむきかけていた由起葉に指を突き出すと、美和は眉間をぐりぐりした。

「うにゃ」
「あんたたちって本当、つながってるんだねぇ。ただのラブラブなカップルじゃないっていうか、私たちじゃ理解できないようなところに結びつきがあるっていうか・・・。昔からそうだったよね」
「そう・・・なのかな？」
「柏井君なら大丈夫だよ。どんなに苦しくても、どんなに悩んでも、ユキハから離れたりしないよ。だからユキハも焦らなくていいんだよ。ただ、ちょっと元気にしてあげるだけでさ」
「どういうこと？」
「以心伝心ってやつ？桜蘭（おうらん）の子に言われちゃってさ」
桜蘭とは多加弥の通う桜蘭学園高校のことである。この辺りでは有名なハイレベル校で、美和の友達も行っているのだ。
「なんて？」
「なんとかしてくれってさ。ユキハがため息ついてるのと同じ調子で、柏井君も沈んでるみたい。周りの子が手を尽くしてもどうにもならないみたいでさ、桜蘭じゃ世界の終わりとか言われてるらしいよ」
「なにそれ」
由起葉は思わず笑ってしまった。
多加弥を苦しめているのは自分。せっかく闇から助けだしたのに、自らの手で再び閉じ込めてしまうのか。
「ミワっち、ありがと」
由起葉は多加弥に会うために携帯を手にした。

次々と桜蘭学園高校の生徒が出てくる。少しクリームがかった白のブレザーに、緑のチェック柄スカート。あの頃もう少し学力があったら、自分も着ていたかもしれない制服だ。

（今なら受かる自信あるんだけどな・・・）
しょうもないことをつい考えてしまう。桜蘭学園に特別行きたかったわけではない。あの頃の由起葉はとにかく多加弥の傍に寄り添うことに必死で、その手段として桜蘭学園も受験したのだ。だが、由起葉は落ち、多加弥は受かった。仕方なく近くの公立高校を受験し、多加弥も共に受けて二人は合格した。
（タカヤ、あのままいけば学ラン着てたんだなぁ）
だがそれは、大人の手によって夢物語にされてしまった。多加弥は抵抗し、由起葉は自分を責めて諦めた。どんなに理不尽だとしても、力のない二人に勝つ術はなかった。
そういえばあの頃もうまくいかなくなったなと思い出す。体が離れると心も少しずつ離れはじめ、話せることも話せなくなっていった。
（あのときは確かタカヤに限界がきて、大変なことになったんだよね）
由起葉の目を覚まさせてくれた出来事でもあった。
結局二人はもう一度同じ道を目指してそれぞれの場所でがんばることを決め、今まで努力してきたのだ。
なのに。
由起葉は右目を閉じて瞼（まぶた）に触れた。
この目のせいで今までの努力も水の泡だ。それどころか他人のことで悩まされ、多加弥とは再び危機を迎えるはめになっている。悪いことしかない。
自分の片目にかけられた呪いとは、見えざるモノが見えるだけでなく、自分の未来を少しずつ狂わされていく本当に恐ろしいものなのではないかと、由起葉は思いはじめていた。
「ユキハ」
遠くから走ってくる人物がいる。多加弥だ。
ただでさえ恥ずかしいのに、多加弥の声に周りの子たちが反応して視線が向けられるので、由起葉はカバンを抱きしめてうつむいた。

「ユキハ、待たせてごめん。わざわざこっちに来てくれたのに」
「それはいいから、大声で呼ぶのやめてよね。タカヤがうちの高校に来るのと私がこっちに来るのとじゃ、わけが違うんだから」
「ごめん。でも俺、泉学好きだよ」
由起葉の通う高校は泉谷高校といい、通称センガクと呼ばれている。
「そりゃ私だって好きだよ。でも好きとか嫌いとかそういう話じゃなくてさぁ・・・」
こんな話をするために会いに来たわけじゃないのに。またため息が出そうになった、そのとき。多加弥の後ろから友人らしき人物たちが次々と顔を出した。
「柏井の彼女？」
「ほら、俺の言ったとおり、ちゃんとした彼女がいるだろ」
「本当だ。すごくまともそうな子だ」
「あ、あの・・・」
由起葉は勢いを失って戸惑い気味だ。男の子が二人と女の子が一人。そのうちの一人はびっくりするほどかっこよかった。由起葉の周りにこういう気品に満ちた王子様のような人はいない。次元が違うとはまさにこのことだ。
「泉学かぁ。セーラーいいねぇ」
「あんまりじろじろ見るなよ。特に右京」
「なんだよ」
「なんかお前だけ興味の対象が違う気がして・・・」
気付くと由起葉は多加弥の背に隠されていた。由起葉は呆れ顔で多加弥を押し退ける。
「はじめまして。岬由起葉です。タカヤとは中学からのつき合いで」
「へぇ、中学からずっと？一途だねぇ」
「柏井君も全然女の子に興味示さないもんね。ミサキちゃんしか眼中にないんだ、きっと。あ、ちなみに私は西本久実。柏井君のク

ラスメイトです」
「俺は右京。三上右京」
「俺も同じクラスで、竜崎清和です」
「りゅ、竜崎っ？」
由起葉は身を乗り出した。驚きで声が裏返ってしまう。
「竜崎って、あの竜崎？」
「あの竜崎か、この竜崎かはわからないけど、竜崎には間違いないよ」
「だからかぁ・・・」
由起葉は感嘆の声をもらした。竜崎といえば、この辺りでも有名な立派な家柄で、その三兄弟は他校に知れ渡るほどの人物なのだ。容姿、能力、そして財力と、彼らにないものはない。桜蘭にいるとは聞いていたが、多加弥と親しいなんて今まで知らなかった。
「ユキハ？」
多加弥にのぞきこまれて我に返る。つい見惚れてしまっていたようだ。じとっとした視線が注がれる。
「ユキハ」
「な、何？」
「竜崎には婚約者がいるんだ。だからダメだよ」
「はぁ？」
大事なところが大きく間違っている。由起葉は脱力した。
「何言ってんのよ。それを言うなら俺がいるのに他の人はダメだよ、でしょ」
「あっ・・・」
バカだ。人前で恥ずかしい。由起葉は赤くなった顔を手で隠したが、その手を多加弥にとられ、今度は強引に引っ張られた。
「言っとくけど、ユキハはダメだからな。特に右京」
「だから何で俺？」
「ユキハ、行こう」
「えっ？ちょっと・・・」

手を引かれて体勢を崩しながらも、由起葉は振り返ってみんなに頭を下げた。多加弥に連れていかれる由起葉に、みんな手を振って返す。

「ありゃ重症だな」

「なんかよくわかんないけど、ミサキちゃんしか無理そうだね、柏井君の相手」

三人は納得すると同時に、ほんの少し不安を感じた。

・蛇と呪いと契約と（4）

多加弥に手を引かれてやってきたのは、同じ敷地内にある桜蘭学園大学だった。土地は一応つながっているのだが、入口は別になっており、大学の方は一般の出入りが自由になっている。

由起葉は西側の入口から入ってすぐにあるカフェへ連れていかれた。

由起葉としてはどこでもよかったのだが、多加弥はどこか焦っているようにも感じた。大学生や桜蘭の生徒の中でテーブルにつきながら、由起葉はまずいなぁと思っていた。多加弥に限界が近付いているのだ。

「ユキハ、帰る前にお茶していこうよ」

「うん・・・。かまわないけど・・・」

いつものデートのときのように無邪気に笑う多加弥。でも、由起葉にはわかる。多加弥のまとう空気の色が変わっている。

大学内のカフェということもあってかセルフ形式なので、多加弥は由起葉の分のオーダーもしに行ってくれた。

戻ってきた多加弥の手には由起葉の頼んだカフェオレと共に、チーズケーキがあった。

「これ、新しくできたケーキなんだ。食べるでしょ？」

「ありがとう・・・」

にこにこと微笑む多加弥に笑顔が向けられない。チーズケーキは好物だ。それをわかっていて持ってきた多加弥の気遣いが、逆に由起葉を追い詰める。

「ねぇ、タカヤ」

「ん？どうしたの？」

「優しくされると、辛い・・・」

「・・・・」

多加弥の顔から笑顔が消えた。

「タカヤ、私たち今離れかけてる。このままじゃダメだって、私だって思ってる。けど、どうしていいかわからないの」
「どうもしなければいいよ。今までどおりでいてくれたら、俺は何も思わないし、不安にもならない。でも、ユキハはあの事故の後から何かが変わった気がするんだ。片目が見えなくなったことが原因なら、俺にはわかってあげられないと思うけど・・・」
見えなくなったならまだよかった。残念なことに光を失った片目は、見えざるモノを見るようになってしまったのだ。
「確かに私は事故の後から少し変になってると思う。でもそれは片目が見えない不自由さのせいじゃないの」
「じゃあ何？」
「それは・・・」
言わなければ。全てを伝えられなかったとしても、ほんの少しでもいい。多加弥と何かを共有しなければ。
心は早まるのに、なかなか口が動いてくれない。由起葉は一度落ち着きたくて窓の外へ視線を流した。それを追うようにして多加弥も外を見たらしく、そこで何かに気付いて声をあげた。
「あっ。梢ちゃんのお父さん」
「え？」
多加弥の視線の先には大学の教授らしき眼鏡の男性が立っていた。
「梢ちゃんて、この前会ったあの子？」
「うん。梢ちゃんのお父さんは海桜（かいおう）大の教授なんだ。ここでは授業をもってないけど、たまに見かけるんだ」
海桜大学は桜蘭学園の系列の大学で、全国でも有数の名門大学である。最先端の設備と優秀な教授陣がそろっており、入るのも難関なうえに学費も馬鹿にならない。同じ系列といえど、エスカレーター式に上がれてしまう桜蘭学園大学とは格が違うのだ。
それでもやはり桜蘭とつながっているためだろう。中には両方で授業を受け持っている教授もいるし、定期的な会合も開かれているらしい。資料の貸し借りなども行われているため、海桜大学の教授

が出入りすることも珍しいわけではないのだ。
「梢ちゃんのお父さんて、すごい人だったんだ」
完全に気持ちが削がれてしまった。安堵(あんど)している自分が憎らしい。
由起葉は視線をそのままに、フォークを手に取った。そのとき、大学生らしき女の人が視界に入ってきた。何回生かわからないが、ずいぶん大人っぽい。
女の人は教授の前に回り込むと、なにやら話しはじめた。あまり穏やかな様子に見えない。
「誰だろ・・・」
多加弥も不思議に思っているようだ。
「なんか妙な雰囲気じゃない？」
「うん・・・」
たぶん多加弥も同じようなことを思っている。だからこそ核心に触れるような発言ができないのだろう。知っている人のことならなおのことだ。
今にも泣きそうな顔をする女の人に、教授も苦しそうな表情を見せる。
「まさか・・・」
多加弥が思わず声をもらしたのは、教授がまるで彼女をなだめるようにそっと頬に触れた瞬間だった。いけないものを見てしまったような気になる。
教授はそれ以上何をするでもなく、彼女を置いて去っていった。ついに涙がこぼれた女の人は、顔を歪めて教授の去っていった方を向いた。その瞬間。
「あっ」
今度は由起葉が声をもらした。カシャンと、音を立ててフォークが落ちる。
由起葉の視界の中で、女の人は蛇をまとっていた。

・蛇と呪いと契約と（5）

由起葉は事故のとき入院していた病院に来ていた。今日は月に一度の検診の日なのだ。

無意味とわかってはいるが、これは呪いなんで何をしても無駄ですよ、なんて言えるはずもなく、由起葉は言われるままに病院に来ているのだった。

大きな病院なのでどうしても待たされる。由起葉は前回と同じ検査を受けて、役に立たない薬をもらうために総合受付の前に座っていた。呼ばれるまではまだだいぶ時間がありそうだ。由起葉は何気なく周りを見回した。

すると、見たことのある後ろ姿が目に入った。もしかしてと思いながら、おそるおそる近付いてみる。

「あ、やっぱり」

「ユキハさん」

振り向いたのは梢だった。

「一人？」

「はい。あ、でもお母さんが迎えに来ます」

「こんな大きな病院に一人で来れるなんて偉いなぁ。私なんて、今でもどこの診察室に入ったらいいのかわからないくらいなのに」

「ユキハさんはどこか悪いんですか？」

「あぁ・・・うん。私ね、片目が見えないんだ」

「えっ・・・」

梢は純粋に驚いている。

「全然気付きませんでした」

「私自身あんまり不自由してないからね。普通に生活できてるし。梢ちゃんはどうしたの？病気？」

梢の表情が曇った。あまり触れられたくない話題のようだ。

「か、風邪かな？流行ってるみたいだし」

まったくのでたらめを口にして、由起葉は場の空気を変えようとした。しかし、梢はますます深刻な顔になる。
「ユキハさん」
「はっ、はい」
「気持ち悪がらないでくれますか？」
「どういう意・・・味・・・」
梢は自分の体を抱きしめるように腕を回して力を込めた。梢の体に何かが起きている。由起葉はそこではっとした。
「まさか」
梢の服の袖を勢いよくまくる。そこに表れたのは、白い肌の上を蛇のように這う痣だった。
「これ、腕だけ？」
梢は首を横に振る。おそらく服の下には同じような痣が這うように伸びているのだろう。
「痛みはないの？」
「はい。大丈夫です」
由起葉は袖をすぐに直した。あまり人には見られたくないはずだ。なんということだろう。由起葉は奥歯を噛み締めた。こんな強い呪いが存在するのか。自分の目にしか見えないわけではなく、痣として誰の目にも映る呪いの形。梢はまだ痛くないと言っているが、さらに進行すればどんなことが起こるかわからない。
由起葉の目には蛇の跡が見える。本体の蛇はきっとあの女性のところだ。桜蘭学園で見たあの涙の女性。教授との間には何があるのか。なぜ梢が狙われているのか。
見えるだけで何もできない。不生の言うとおりだ。だが、だからといってここで何も見なかったことにするのか。そんなこと、由起葉にできるわけがない。
「梢ちゃん、私にできることないか、考えてみる」
「でも、先生も原因がわからないって」
「だからってこのままにはしておけないよ。きっと何とかする。

できることが絶対あるはずなんだ」
由起葉はしっかりと梢の手を握った。暗かった梢の表情が少し和らぐ。
「ユキハさんて、タカヤお兄ちゃんとちょっと似てます」
「えっ？」
「タカヤお兄ちゃんの彼女さんがユキハさんでよかった。私、二人とも大好きです」
「梢ちゃん・・・」
由起葉は心が揺さ振られた気がした。忘れていたものがよみがえるような感覚。
自分は多加弥から離れてはいけない。どんなに危ないときだって、二人でいなければいけないのだ。

その頃、多加弥は独自にあの女性のことを探っていた。
「なんで俺が海桜大のこと調べなきゃいけないんだよ」
「そう文句言うなよ」
「だいたい清和に頼めばよかったじゃねぇか。あいつの兄さん海桜大なんだしさ」
「右京。お前が知った事実をもってして、それを言えるか？」
「まぁ、うん・・・。難しいところだ」
教授とのただならぬ関係なんて、清和のような汚れを知らないタイプに調べられるわけがない。というか調べさせたくない。
「で、わかった？」
「足立歩美（あだちあゆみ）。桜蘭学園大学の大学院生で、山上（やまがみ）教授とは不倫してたみたいだな」
「してた？なんで過去形なんだよ」
「山上教授の方が家族をとったことで関係は終わったみたいだぜ」

「終わった・・・？」
そんな風には見えなかった。少なくとも歩美の方は納得していないように感じた。
「ところで、なんで柏井がこんなこと調べてるわけ？」
「俺の近所にさ、昔仲の良かった女の子がいるんだ。その子とさ、最近偶然会って、また遊ぼうねって感じになって・・・」
「その子とこの件となんの関係があるんだよ」
「その子のお父さんが山上教授なんだ」
「へぇ・・・。って、マジかよ」
右京はわかりやすく驚いていた。
「でもさ、他の家の事情にそこまで首突っ込まない方がいいんじゃねぇの？結局、山上教授は家族を選んだわけだしさ」
「そうもいかないんだ」
「柏井？」
「ユキハが首を突っ込もうとしてる以上、関係ないってわけにはいかないんだよ」
今度こそ由起葉の横に並んでみせる。
あの日、梢の腕を見たとき。そして大学のカフェで歩美を見たとき。由起葉は何かを感じていた。自分にはわからない何かを。
多加弥は決めたのだ。どんなに頼んでも由起葉が危ない行為から身を退かないというのなら、自分も自ら危険に飛び込んでやろうと。知らないことは知ればいい。わからないことは調べればいい。
たとえ由起葉が自分を拒んでも、必ず傍にいる。多加弥の決意は固かった。

・蛇と呪いと契約と（6）

週末、由起葉は多加弥に呼ばれて家まで向かっていた。梢のことで話しておきたいことがあるということだった。

多加弥は何か知っているのだろうか。蛇の姿は見えなくとも、あの女性と梢の関係について何か知っているなら、解決の手がかりになるはずだ。由起葉の足は自然と早まっていた。

家の用事があったため、かなり時間が遅れた。住宅地は夕暮れ時を過ぎて、薄暗く静かだった。妙な胸騒ぎがする。気持ちが急いているせいだけとは思えない感覚だった。

あと少しで多加弥の家というところで、由起葉は道の上に黒い影を見つけた。人が倒れている。

駆け寄ってみてびっくりした。倒れていたのは梢だったのだ。

「梢ちゃん。どうしたの？しっかり」

「ユ・・キハ・・・さん？」

弱々しい声で呼ぶ梢の額は汗でびっしょりだった。とても苦しそうだ。

「苦しいの？とりあえずタカヤの家まで運ぶからね。しっかりするんだよ」

由起葉は梢を抱き抱えようと腕を回した。そのとき、梢の首の辺りを何かが這った。薄暗いうえに素早く、よく見えない。由起葉は目を凝らして梢を見つめた。

「なに・・・これ・・・。そんな・・・」

見えたのは梢の体に巻きつく蛇の姿だった。跡ではない。蛇本体が梢の体にまとわりついて絞めあげているのだ。

由起葉は蛇をつかんで引き剥がそうとした。しかし、見えているのに触れることができない。

（どうしよう。このままじゃ梢ちゃんが）

「ナギっ」

呼ぶとナギはすぐに寄ってきた。だが何もしようとしない。
「ナギならできるでしょ？どうして前みたいに払ってくれないの？」
ナギは躊躇っているようだった。蛇をくわえようと口を開けるが、噛み付こうとしてやめてしまう。
「もしかして、梢ちゃんまで傷付けちゃうからできないの？」
「ガウゥ・・・」
これだけ呪いが体に密接していては手が出せないようだ。由起葉は蛇ごと梢を抱いて多加弥のところまで向かおうとした。
「苦しそう」
「えっ？」
突然声がして顔を上げると、道の先に人が立っていた。由起葉はその人物の顔を見て驚く。あの女性だ。暗がりからこちらを見ているのは足立歩美だった。
「本当に辛そう」
「あなた、なんでこんなところに・・・」
歩美の体にも蛇が現れる。その蛇の頭が梢に近付き、梢の蛇の頭を食らって一匹になる。それを待っていたかのようにナギが素早く動いた。二人をつなぐ蛇の胴体に牙を立てたのだ。
蛇は驚いたように波打つと梢の体から離れ、歩美の元へと帰った。梢はすでに気を失っていたが、これでとりあえずは大丈夫そうだ。
「その子、まだ生きてる？」
「生きてるわ。大丈夫よ」
「残念。死んじゃえばいいのに」
「なっ・・・何言ってんの？」
「死んじゃえばいいのにって言ったのよ。その子さえいなければ私とあの人は結ばれるんだから」
（なんなの？この人おかしい）
由起葉は梢を抱く手に力を込めた。
「梢ちゃんに何の罪があるっていうの？」

「罪・・・？そうね、生まれてきたことがそもそも罪なのよ」
「なによ、それ」
「その子がいるからあの人は私を捨てなくちゃいけない。こんなに愛し合ってるのに、いらない子供のせいで私たちは幸せになれない」
「あの人って、梢ちゃんのお父さんのことを言ってるの？」
「そうよ。山上教授はいつも私に優しかった。いつも大きな力で包んでくれたの。私は言ったわ。あなたなしではもう生きられないって。でもね、拒否されちゃったの。子供がいるから無理だってね」
歩美のまとう蛇が蠢(うごめ)きだした。
「諦めようとしたの。でもできなかった。そこで気付いたの。子供がいるから無理だっていうなら、子供がいなくなればいいんじゃないかって」
「それで梢ちゃんを狙ったなんて、あんた狂ってる」
「そう、狂ってる。でもね、愛は人を狂わせるものなの。私にはもう、あの人しかいないの」
歩美の手に何かがきらめいた。ナイフだ。歩美は自らの手で梢を消しに来たのだ。
「苦しんでたからそのまま死んじゃえばいいって思ったのに、生きてるなら仕方ないわね。あなたも一緒に殺してやるわ」
「なんて勝手なの。梢ちゃんには何もさせないからっ」
由起葉は蛇と刃物、両方から梢を守らなければいけなくなった。
負けたら自分の命もない。由起葉は意を決して対峙した。

その頃多加弥は、由起葉がなかなか来ないので気になって表に出ていた。電話をかけてみるが出ない。多加弥は家の近所を探しに向かった。

人気がなく静かだ。こんな時間に由起葉を呼んだことを少し後悔する。もし由起葉に何かあったら自分のせいだ。多加弥の足は自然と早くなった。

家の周りを見て回って、ちょうど一周しようかというところで、多加弥は小さな物音に気付き、そちらの方に足を向けた。誰かいる。

「あっ・・・」

多加弥の目には向き合う由起葉と歩美の姿が映った。傍には梢が倒れている。

「ユキハっ」

「タカヤ？」

多加弥の声に反応して振り返ろうとしたとき、歩美が動いた。ものすごい勢いで斬り掛かってくる。

「くっ」

かろうじて避け、手を押さえ込もうとする。こうなれば由起葉の方に勝算がある。多加弥のように本格的ではないものの、由起葉もそれなりに武術の心得があるのだ。

「なんで・・・なんで邪魔するのよっ」

「あんたこそ目覚ましなさいよっ。犯罪者になりたいの？」

「うるさいっ。私と教授の愛を邪魔する奴は、みんな消してやるっ」

歩美の体に巻きつく蛇がぐるぐると動き回りだした。由起葉の腕にも巻きついてくる。

「ユキハっ」

「タカヤ。梢ちゃんを連れて逃げて」

「何言ってんだよ」

「私は大丈夫だから。梢ちゃんを安全なところへ」

多加弥は梢に近付いた。

「連れていかせないっ」

歩美の力が増した。それと同時に体から蛇が離れる。蛇は梢目がけて襲いかかった。その間に多加弥が入る。

「タカヤっ」

由起葉の目には多加弥の腕に絡み付く蛇の姿が見えた。

・蛇と呪いと契約と（7）

真っ暗だった。いや、暗いのではない。自分の周りが真っ黒なのだ。その証拠に自分の体はよく見える。

「いやぁ、久しぶりだね」

「誰だ」

突然声がして顔を上げると、さっきまで真っ黒なだけだった空間に男が立っていた。白い髪に赤い瞳をしている。

「俺、あんたのことなんて知らないけど」

「あぁ、そうだね。君は死にかけてたし無理もないね」

「いったい誰なんだ。それに、ここはどこなんだ？」

自分はさっきまで由起葉と同じ場所にいたはずだ。歩美に襲われて、梢を助けるために近付いたところまでしか記憶がない。瞬きの次に目を開けると、多加弥はここにいた。

「そんな難しい質問されても、答える言葉が見つからないよ」

「夢でも見てるのか？」

「夢でも幻でもないよ。でも、現実ともちょっと違う」

「俺を帰してくれ。ユキハを助けなくちゃいけないんだ」

「あぁ、確かに今、彼女はピンチだね」

「ユキハのこと、知ってるのか？」

「知ってるとも。君のことだって知ってるよ。あの子がいい子でよかったね。そうじゃなきゃ、今頃君はあの事故で死んでる」

「事故・・・」

「覚えてるだろ？車に跳ねとばされて君たちは死にかけた。そのとき君たちはこの世界に来たんだよ。もっとも、君は虫の息だったけどね」

そんな馬鹿な。確かにあの日、多加弥は由起葉と共に事故にあった。直後の記憶はなかったが、目覚めたときにはさほど深い傷もなく、すんなり退院できたくらいだ。それが虫の息だったなんて。

「あのとき、いったい何があったんだ・・・？」
「教えてあげようか。でも、知ればもう後戻りはできない。このまま何も知らずに彼女から離れて生きていけば、君には限りない幸せな未来が待っているかもしれない。だが、知れば君は、死ぬまで彼女の傍で運命と戦い続けることになるかもしれない。それでも教えてほしいと？」
「当たり前だ。俺にはユキハしかいないんだ。今も昔も、そしてこれからも、ユキハから離れるつもりなんてない」
「愛されてるなぁ、彼女」
不生は満足そうに笑った。
「彼女はね、ワタシと契約したんだよ。呪いの契約。君を助けるために自分の眼を売ったんだ」
「眼を・・・？まさか、ユキハの右目が見えないのって」
「事故のせいじゃない。君がとっさに彼女をかばったおかげで、彼女はわりとまともに生きてたよ。ただ、逆に君が死にかけてた。あのままだったら病院に運ばれても助からなかったと思うよ」
「でも俺は生きてる・・・」
「そう。彼女は自分の眼をワタシに捧げて契約し、ワタシはその代償として君を助けた。ただ、あまりにも君の魂が消えそうなくらい弱っていたから、彼女の魂を半分いただいたけどね」
「どういうことだ」
「だから、今君の中には彼女の魂が半分宿ってるってこと。ちょっとは感じるだろ、自分の思いの外で感情が揺れたりするの。彼女の魂が受けるものは君にも少しは伝染するようになってるからね」
信じられないような話だったが、多加弥には思うところがあった。
今まで以上に由起葉のことを心配したり、不安になったりしたのは事故からの精神的不安定さによるものだけではなかったのだ。そして今まで以上に由起葉を求める心の奥の熱も、きっと魂が呼び合っていたからなのだ。
それなら、なおさら離れるわけにはいかない。由起葉と自分が二

人で一つだというなら、傍にいて当たり前ではないか。
「ユキハが俺を助けたなら、今度は俺がユキハを助ける番だ」
「でも、今の君には力が足りない」
「足りない？」
「そう。今彼女が戦っているものが何なのか、君にはまだわかっていない」
「何を言ってるんだ？ユキハは今あの女に殺されかけてる。だから早くここから戻してくれ」
「あの女性を押さえ込んでも彼女は助けられないよ。それに君の可愛いお友達も」
「梢ちゃんも？」
「いいものを見せてあげよう」
不生は多加弥の右腕の辺りを指差して軽く振った。すると、そこに巨大な蛇が姿を現した。蛇はがっしりと多加弥の右腕に絡みついている。
「なっ、なんだよこれっ」
「呪い。あの女性が君のお友達にかけた呪いの形だよ」
多加弥は必死でつかもうとするが触れることができない。
「触ることはできないよ。呪いっていうのは普通見えたり触れたりできるもんじゃないからね。ただ、彼女には見えてる。彼女の右目には、今君が見ているものと同じものが見えてるんだ」
「まさか・・・」
「でも、見えるだけで触れられない。だから呪いと直接的に戦うことができない。彼女は呪いが人を苦しめる様を生々しく見ることができるだけで非力なんだよ」
多加弥が感じていた違和感はこれだったのだ。由起葉にだけ見えるモノ。自分にはわからない何か。
「彼女の片目は契約により呪われ、見えざるモノが見えるようになった。そして正義感の強い彼女は呪いを何とかしようとして苦しんでいる」

「でも見えるだけで触れることもできない・・・」
「そう。だからワタシから提案なんだ。君、左腕をワタシによこす気はないかい？」
「なっ・・・」
「左腕をワタシに捧げて契約すれば、君は呪いに触れるようになる。その蛇だって、つかむことはおろか、引きちぎることだってできるようになる。どうだい、力を得て彼女を助けないか？」
「腕を捧げる・・・」
「捧げたからって腕がなくなるわけじゃない。心配しなくても生活できる程度にはちゃんと動く。ただ、もし契約すれば君の左腕は一生繊細な動きができなくなるだろう。たとえば、ピアノを弾くとか・・・」
多加弥はピアノの一言に気持ちが吹っ切れた。この男はどこまで自分のことを知っているのだろう。
「ピアノなんて、一生弾けなくなってもかまわないさ。片腕くらいあんたにくれてやる。それでユキハを助けられるんだろう？」
「力しだいだが、君なら彼女を守れるだろう。契約成立だ。左腕を前へ」
多加弥は言われたとおり腕を出した。不生は肩から指先まで、なぞるように手を当てていく。すると、多加弥の腕から光があふれ、やがてその光は一つにまとまって不生の手の中に渡った。
「なかなか力強い光だ」
不生はその光を呑み込んだ。その瞬間、多加弥の左腕を激痛が襲う。多加弥は腕を押さえてうずくまった。
「ぐっ・・・」
「少ししたら収まるから、我慢してくれ。これでこの世界を出たら君は呪いに触れることができるようになっている。彼女のように鮮明には見えないが、呪いの存在を認識できるようにもなっている。彼女を守ってやってくれ。君ならそれができる」
「あんた、いったい何者なんだ・・・」

「ワタシは不生。今はそれ以上言えない。ワタシは君も彼女も失うわけにはいかないんだ。だから、頼んだよ」
「ユキハのことなら、任せてくれ」
多加弥はそのまま意識が薄れていった。

・蛇と呪いと契約と（8）

「タカヤっ」

由起葉の声に目を開く。少し頭痛がして手で押さえた。

現実だ。多加弥は自分の右腕を見た。何か黒い影のようなものが絡みついている。その姿は鮮明にとらえることができないが、由起葉の目には蛇として映っているだろう呪いに違いなかった。

多加弥は左手で影をつかむと、引き剥がして真っ二つに引きちぎった。影は散って消えていく。

「タカヤ・・・？どういうこと？」

「話は後で。それより早くナイフを」

「う、うん」

由起葉は歩美の手からナイフを叩き落とした。落ちたナイフを蹴って遠くへやる。

歩美はそのまま崩れるように座り込んだ。

「どうして・・・。どうしてダメなの・・・」

「足立さん」

多加弥は歩美の前にしゃがみこむと、地に着けた両手の上に手を重ねた。

「山上教授は俺の知る限りではそんなに軽い人ではありません。だからあなたとのことも、ただの遊びだったとは思えない。けど、山上教授は今の家族を選んだんです。その気持ちを考えてはくれませんか」

「考えたわよ。私だって考えたの・・・。でも、そんなに簡単に割り切れないじゃない」

「そんなの勝手だよ。そもそも間違ったことしてるのは・・・」

「ユキハ」

怒りの収まらない由起葉を多加弥は制した。

「私にはあの人しかいないの。あの人だけが私を見てくれるの」

「今はそう思うかもしれない。けど、あなたには未来がある。もっと素敵な人を見つけられる可能性がある。でも、梢ちゃんには父親は一人しかいないんです。そのたった一人の父親をあなたは奪い、梢ちゃんまで手に掛けようとするんですか？」

「あの人より素敵な人なんて、見つからないわよ・・・」

「あなたに見せる山上教授の優しさや強さは、梢ちゃんがいるからできるものなんですよ。その大事な娘を失って、果たして今までのようにあなたに優しくできるでしょうか。たぶんできないと思ったから、山上教授はあなたと別れることを決めたんじゃないですか？」

「・・・・」

「もう一度冷静になって考えてください。ただ、俺にはあなたが新しい恋を見つけるのは不可能だと思えない。今は自分の思いにとらわれているだけです。ずっと先の未来まで笑いあえるような相手を、どうか見つけてください」

多加弥は歩美から離れると梢を抱き上げた。歩美は動かずに、ただじっと地を見つめていた。

「ユキハ、とにかく梢ちゃんを家まで運ぼう」

「う、うん」

多加弥は振り返らず歩きだした。由起葉は急いで後をついていく。多加弥の腕の中で、梢は静かに眠っていた。

梢の家に着くと、父親の山上教授がすぐに玄関までやって来た。

「梢っ。いったい何が？」

「えぇと・・・」

「今日は病院の日で、私も妻もついていってやることができずに一人で行ったんだ。なかなか帰ってこないから心配して、妻がちょうど病院まで向かったところなんだよ」

言葉を探す多加弥の横から由起葉が出た。

「梢ちゃん薬が効きすぎちゃったみたいで。私一緒に帰ってきたんですけど、薬の作用のせいか途中で寝ちゃったんです。一人じゃ

運べなかったからタカヤを呼んだりしてるうちに遅くなってしまって。心配かけてすみません」
「そうなんですか。いや、こちらこそご迷惑を。タカヤ君も梢を連れてきてくれてありがとう。妻にもすぐ連絡して戻ってきてもらいます」
山上教授は多加弥から梢を受け取った。
「よかったですね。薬、すごく効いたみたいですよ」
「えっ」
「私、梢ちゃんと同じ病院に通ってるんです。ユキハといいます。梢ちゃんによかったねって、伝えておいてください」
山上教授は梢の手や足に視線を落とした。そこで初めて痣が消えていることに気付く。
「あ、あの」
「今日はこれで失礼します。お大事に」
由起葉は頭を下げて背を向けた。多加弥も同じように去ろうとして、呼び止められる。
「タカヤ君」
「はい」
「また・・・。またいつでも遊びにおいで」
「はい。ありがとうございます」
多加弥はにっこりと笑い返した。山上教授はほっとした顔を見せる。空白の時間はこれからゆっくりと埋まっていくだろう。
外はもうすっかり暗くなっていた。二人でふらふらと歩きながら、冷たくなった風を感じていた。
「とっさにあんなこと言えるなんて、すごいね」
「え？」
「梢ちゃんのこと」
「あぁ。薬の話は嘘だけど、病院で一緒になったのは本当なの。梢ちゃん、体中に痣みたいな跡ができてて、それを診てもらってたみたいでさ・・・」

由起葉は足を止めた。思い詰めた顔になる。
「タカヤ。いったい何をしたの？」
「何って？」
「だって、その・・・あのとき見えてた、よね？」
「ユキハ」
多加弥はゆっくり近付くと、由起葉をそっと抱きしめた。
「俺を生かしてくれたのはユキハなんだね。ありがとう。今まで俺は、何も知らずにユキハを独りにさせてたんだ。これからはユキハの足りないところを俺が補っていくから」
「タカヤ・・・何で？」
「フキっていう男と会ったんだ。左腕と引き替えに契約もした」
「どうしてっ」
「生身の腕じゃユキハを守れないからだよ。俺はユキハを失うわけにはいかないんだ。俺の手で守れるなら、腕の一本くらい惜しくない」
「タカヤ・・・」
由起葉は涙がこぼれた。
「なんでなのかな。苦しいのに・・・うれしい」
多加弥はその涙を拭(ぬぐ)うと、静かにキスをした。
「好きだよ、ユキハ。もう独りにさせないから」
多加弥のささやきは、夜の闇の中で由起葉を優しく包んだ。

4その先へ

よく晴れた昼下がり。道場からは激しくぶつかり合う音と、気合いの掛け声が聞こえていた。

「どうしたっ。その程度か」

棍(こん)という棒状の武器を使ったやり合いが行われている。見合っているのは多加弥(たかや)と、由起葉(ゆきは)の兄の二葉(ふたば)だった。

完全に多加弥の方が押されている。二度の連続攻撃を受けて体勢を崩したところを、二葉は容赦なく弾き飛ばした。倒れた多加弥の顔の真横に棍が振り下ろされる。

「お前の負けだ」

「参りました・・・」

「そんなことでユキハを守れるのか？俺は弱い男にユキハをやるつもりはない」

二葉は棍を下げると、仁王立ちで多加弥を見下ろした。

「まぁ待て。帰ってきて早々やりすぎだぞ」

なだめるように入ってきたのは二葉と双子の一葉(いちは)だ。一葉はここで道場を受け継ぎ、師範として武術を教えている。武術といっても普段は太極拳(たいきょくけん)がメインの穏やかなもので、護身術くらいは教えるが、二葉のしている棒術などは基本やらない。道場の中でも棒術をやるのは限られた者だけだ。

「だいたいお前は野蛮(やばん)でいけない。元々の師範も相手を攻撃することを目的に武術を教えていたわけではないんだぞ。この道場はだな・・・」

「あぁ、わかった、わかった。もう何度も聞いてるから」

「何度も聞いてるならいいかげん直せ」

兄弟喧嘩が始まりそうな雰囲気だ。そこに救世主とでもいうべき人物が現れた。

「あれ？二葉兄ちゃん。帰ってきてたんだ」

「ユキハっ。会いたかったぞぉ」
二葉は棍を投げ捨てて由起葉に飛びついた。その様を見て一葉は呆れているが、実はこの兄二人、どちらもシスコンだった。
「ぐ・・・ぐるじぃ・・・」
「おぉ、すまん、すまん」
「二葉兄ちゃん、大会どうだったの？」
「あぁ・・・。やっぱり強い奴は多いな。残念ながらまた優勝を逃した」
二葉は武術の大会に出るため中国まで行っている。日本人にしてはなかなかの腕の持ち主なのだが、やはり本場で優勝するのは難しいようだ。
「そっか。お疲れ様」
「ありがとう、ユキハ。お前に出迎えてもらえるなら優勝できなくても俺はうれしい」
「さっきまで暴れ回っていた人間とは思えんな」
「いいじゃないか。久々のかわいい妹との再会なんだぞ」
「久々って、一週間も経ってないよ・・・」
由起葉の突っ込みもまるで聞いていない。なんとも豪快で、厄介な兄だ。
「ところでタカヤ君。どうしたんだい？左手」
「えっ」
「わからないとでも思ったかい？」
多加弥は正直驚いていた。
「自分では大丈夫だと思っていたんですが・・・」
「なんだ？俺にやられたのは左手のせいだって言うのか？」
「違います。負けたのは俺の修行が足りなかったからです」
多加弥は自分の左手を見つめた。
「一見力業（ちからわざ）に見える棒術だって、繊細な動きが必要とされる。自分ではいつもどおりやっているつもりでも、見る人が見ればわかるもんだ」

「俺だってわかってたぜ」
「本当かよ」
一葉は疑いの眼差しを向ける。
「あのね、タカヤの左手、事故の後遺症みたいなの。やっぱり支障あるのかな？」
「まぁ、ないとは言えないが」
「いいんじゃねぇの、俺みたいに大会に出るのが目標じゃないんだし。中途半端な奴はそれなりにできればそれで・・・」
二葉の発言に、多加弥は強い眼差しで見返すと立ち上がった。
「腕の一本くらい、どうってことありません。こんなのハンデでもなんでもない。必ず強くなって超えてみせますからっ」
「タカヤ・・・」
「言ったな。だったらユキハにうつつをぬかしてないで修行しろっ」
せっかく立ち上がったのに、バカ兄貴によって多加弥は再び吹っ飛ばされた。
「なんて野蛮なんだ。すでに武術でも何でもない」
「一葉兄ちゃん、冷静に見てないで止めてよぉ」
「やれやれ。ユキハの頼みなら仕方ないな」
そして間に入った一葉によって、二人は共に道場から放り出されたのであった。

・その先へ（2）

由起葉は多加弥と二人で川辺の土手に座っていた。
道場の近くにある川で、子供たちの遊び場のひとつだ。さすがにこの時期に川に入っている人はいないが、川べりの道には犬の散歩をする人やジョギングをする人などがちらほらと見受けられた。
「大丈夫だった？二葉兄ちゃんは力加減を知らないから」
「そうかな。あれでもまだ本気じゃないと思うよ。俺ももっと強くならなきゃな」
「そんなに強さにこだわらなくていいよ。タカヤの持ち味は力じゃないもん。道場に引っ張り込んだのだって、強くなってもらうためじゃなかったし」
「わかってるよ。むしろ力を押さえるために武術を習ったんだ。おかげで今は心のコントロールもできてる」
多加弥は自分の胸に手を当てた。由起葉には、その仕草が別の意味を持っているように感じた。
「タカヤ。フキから聞いたんだよね・・・」
「事故のときのこと？」
由起葉はうなずく。
「全部私が勝手に決めたの。タカヤは望んでなかったかもしれないけど、私が生きててほしかったから、契約したの」
「確かに、そのとき意識があったら止めてたかもしれない。でも、今はよかったって思うよ。少しでも長くユキハの横にいられるのは、幸せだなって思う」
「タカヤは人が良すぎるよ。少しは私を恨んで。自分の望みで生かしたのに、厄介ごとに巻き込んで左腕まで失わせた。私、時々思うの。私はタカヤの人生をメチャクチャにしながら生きてるんじゃないかって。自分の都合のいいようにタカヤを動かしてるような気がして・・・」

こんな風になる前から少しずつ思いはじめていたことだった。わがままにつき合わせたり、多加弥自身を否定したりするようなことはなかった。強引に多加弥を動かしたのは、道場に入れたときくらいだ。だが、それからというもの、何も言わなくとも多加弥の在り方が由起葉の心地いいように変わってきたように思うのだ。もし多加弥が、由起葉が自分でも気付いていない深い部分の欲に応えようとして生きてきたならば、由起葉には罪がある。

「それでいいんじゃないかな」

多加弥はあっさりと言った。由起葉の罪の意識なんて吹き飛ばすくらい、爽やかな笑顔だった。

「ユキハに出会う前の俺は、自分がどうしたいのかも、どこに立っているのかもわからないような状態で、ただ何かから逃げたくて逃げたくて、もがいていたんだ。生きてる意味も見つけられないのに、屈するのが嫌でとにかく生きてる。そんな自分しかなかった」

由起葉は出会った頃の多加弥を思い出していた。有り余る力で暴力ばかりの日々。由起葉が初めて声をかけたときも、多加弥は相手の返り血で汚れていた。

「でも、ユキハが見つけてくれた。俺を導いてくれた。ユキハに流されてるって見方もできるけど、それでいいと俺は思ってる。だって、ユキハは俺をいつも正しい方向にしか連れていかないから」

「そんなことないのに・・・・いいように考えすぎだよ」

涙がにじんで視界が揺れた。

幸せにしなければと思う。多加弥を幸せにすることで、きっと自分も幸せになる。魂の連鎖とはそういうことにもつながっているはずだ。

これからどんな運命が待っているのかわからない。それでも二人は進んでゆく。

どこまで続くかわからない道のりの、今はほんの始まり。お互いを見失わないように強く手をつなぎながら、ただ全力で生きるだけだ。

・その先へ（2）（後書き）

今まで読んでいただいた皆様、本当にありがとうございました。
次につなげるつもりで書いたため、少し説明っぽくなってしまったかなとも思います。なんでここでこの話？みたいな場面もあったかも・・・。登場人物もちょっと中途半端な出方になっちゃいましたね。
次はもっといろんな人を活躍させて、もっと深いところまで書けたらなぁと思っています。
どうぞタカヤとユキハを温かく見守ってやってください。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9723n/

呪眼―黒の契約

2010年11月18日23時36分発行